
バカばっかの君たちへ～アホメンパラダイス～

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカばっかの君たちへ～アホメンパラダイス～

【NNコード】

N9700C

【作者名】

黒

【あらすじ】

バカテスの世界にオリキャラと設定を加えたドタバタコメディー！
基本的に原作沿いでお送りします

一巻終了しました

ふるわーぐ！

【第一問】

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、マグネシウムを材料に選んだ。この時に発生する問題点と代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険である
合金の例…ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄では駄目なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね

土屋康太の答え

『ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

そりは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例…未来合金（す／＼強）』

教師のコメント

す／＼強いと言われても

雑賀佳史の答え

『知らん！』

『金の例…アルミニウム』

教師のコメント

近づいてしまつなのにアルミニウム合金が存在するのが腹立たしいです

文月学園に通じる道

その両脇は俺達が入学した時と同じように桜が咲き誇っていた

「おはよー、佳史」

「おはようじや。佳史」

突然声を掛けられて振り向くと、幼なじみの双子が揃っていた

「おはよー、優子に秀吉。にしても珍しいな。お前らが一緒に来る
なんて」

「それはワシ達と別に仲が悪い訳ではないから」

この翁言葉で話す美少女…もとい男の娘は木下秀吉。男なのに男に
大人気な奴。

ちなみに演劇部のホープである

「今日は秀吉の朝練がなかつたのよ」

そして秀吉と瓜二つの姉の木下優子。外では優等生を氣取つてゐるが、
家ではズボラな奴

「佳史、今何か余計な事考えなかつた?」

「……」

ダツ!

「あー待ちなさいーー！」

「待てと言われて待つバカはいない！」

こんな所で死んでたまるか！

「おお、 雜賀か」

「ん？ 鉄人？」

「西村先生と呼べ！… つたく、俺を前にして堂々と鉄人と呼ぶのは
お前と坂本くらいだぞ」

玄関の所で俺を呼び止めたのは西村教諭。 通称鉄人。 トライアスロ
ンが趣味でガタイがヤバい人

「いや、 先生を鉄人と呼ばずに誰を鉄人と呼ぶんすか？」

「誰も呼ばんでいい！全く… ホラ、 受け取れ」

鉄人が封筒を俺に手渡す

そしてちょうどその時

「佳史、 アンタ足速すぎるわよ…」

「やつと追いついたぞい…」

「ん？木下姉弟か」

「あ、西村先生、おはようござまわ」

「おはようござまわじや」

「ホラ、お前、ちや」

そう言つて一人にも封筒を渡す

もうひとり一人はすぐに封筒を開けて…

「よしつーAクラス！」

「やはりエクラスじやー…」

まあ、妥当つひや妥當か

「佳史、アンタはどうだったの？」

ま、アンタはAクラスよね、と付け足す優子

「今から見る所だよ。そう焦んなつて」

あ～…糊付けが強すぎて捲れないな…

「…雑賀」

「はー?」

「今だから言うがな、俺はお前を『吉井と坂本に並ぶ問題児じゃないか』と疑っていた」

「失礼な。人をバカ扱いしないで欲しいですね」

「ああ。振り分け試験の結果を見てお前への疑いは無くなった」

「もういいや。破つちまえ

俺は封筒を破つて中身を確認する

それを横から優子も覗いて来た

そこには、達筆なじで一文字『F』と書いてあった

「お前は問題児だ…化学以外全て寝るとは良い度胸だな」

「この…バカー…！」

「ちょ！？何でお前がキレて…待て！その関節はそっちには曲がらなあああ！」

何故かお怒りの優子にサブミッションをくらしながら、必死にタップする

「やれやれ、姉上も素直になればよいのにのぉ

秀吉が何か呟いていたが、痛みで全く頭に入らなかつた

こうして俺のFクラス生活が始まった

第一問

【第一問】

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつた上に更に悪い事が起こる喩え

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法も筆の誤り

(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも『河童の川流れ』や『踏んだり蹴ったり』などが
ありますね

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師の「メント

君は鬼ですか

雑賀佳史の答え

『　　』　『ダレの跡

教師の「メント

後で職員室に来て下下さい

「だから悪かつたって（何がかはわからんけど）」

「……（ハイツ）」

今、何故か機嫌が悪くなつた幼なじみをなだめています

…信じられるかい？」の調子が五分くらい続いてるんだぜ？

「ほら、姉上、いい加減機嫌を直すのじや。もうAクラスに着いたぞい」

あ、本当だ

パツとみた所、設備はリクライニングシートに個人エアコン、挙げ句の果てにはフリードリンクに個人冷蔵庫

…どこのホテルだよ

「良かつたじゃねえか優子。恐ろしく凄い設備だぞ？」

「……アンタがいないと意味無いじゃない

「？何が言ったか？」

「何でも無いわよ……そうね。じゃあ私は一年間この教室で快適に過ごさせてもらひつか

「つだけ見てニシ」コリ笑つ優子

「こや、田が笑つてなこけべしも

「やれやれ……」の調子じやあじばくは機嫌が直りやうに黙つて

「やつ思つて秀吉が俺の肩に手を置き

「…」

「…ワシが姉上に口喧嘩令めて勝てた事が一度でもあつたかの？」

「…」

「まあ、ある程度予想はしてたがの…」

「本当に教室かい？」

もうなんか見ただけでわかる環境の悪さ。こいつ何でも差あつすが
だろ

「ま、まあ中は案外マシかもな！」

「や、セイジヤのー。」

ガラッ

「 「 …… 「 」

ボロボロの卓袱台。腐った畳。割れた窓。

廃屋と言われた方がしっくりくる

あまりの設備に立ち尽くしてみると

「ん? 秀吉」「… 佳史ー? わ前何で!」「ー! ?」「

悪友の一人の坂本雄一が話し掛けてきた

「一限目の化学以外全部寝ちまつたんだよ…」

「ふつー… わ前らしこつちや わ前りしこか

「で? 雄一よ。 わ生はなせいで何をしておるのじや? 」

雄一は今教卓に両手を着いている

「ああ。 先生が遅れてるらしいから教卓に上がつてみた

「… ハー! とはお前がこのクラスの代表か?」

「ああ。 これでこのクラス全員俺の兵隊だな」

野性味溢れる笑顔を「ひつじに向けてサムズアップする雄」。

… とりあえずその親指を逆に曲げたい

そして暫く二人で談笑していると

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

「さつわと席に着け」のウジ虫野郎…」

台無しだーーと言わんばかりにリアクションをとる男子生徒

「よつ明久。お前はやっぱりFクラスか

「あー佳史。やっぱりって酷くない…」

こいつは吉井明久。俺の悪友その2。特徴は…

「じゃあFって何だ?」

「あまり僕をバカにしないで欲しいな。硝酸でしょう?」

この通り生糀のバカだ

「アンモニアだバカ」

「え?…あはは、それにしても…流石はFクラスだね」

「逃げたな」

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

声がした方に顔を向けると、担任らしき中年の冴えないオッサンがいた

「それと席についても『れますか？ホームルームを始めますので』

「わかりました」

「うーっす」

「へーい」

え？秀吉？チャイムが鳴る前に席についてるけど？

「一年Fクラス担任の福原慎です。よろしくお願ひします」

そう言って黒板に名前を書いて…チョークがないので断念。
流石最低クラス

「全員に座布団と卓袱台は支給されますか？不備があれば申し出て下さい」

不備しかありません…とは流石に言えない

その後数人が不備を申し出たが、『我慢して下さい』か『自分で何とかして下さい』で押し切られた

…本当にここは学校なのだろうか？

「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひします

その眞葉と同時に立ち上がつた我が幼なじみ

「木下秀吉ぢや。演劇部に所属しておる」

「一か本当にアリの女子より女子らしきな。

「アリニ佳史とは幼なじみぢや」

「殺せえええー。」「

「えーへりょー?何故にー?」

「黙れ男の敵!貴様木下秀吉と幼なじみと眞つ事はあんな」とや
んなことを…」

「あらか……秀吉は男だ!」

「違ひー秀吉は『秀吉』だ!」

「ワシは男ぢや!」

秀吉が抗議するがガソ無視

「諸君、リハはだいだー。」

「最後の審判を下す法廷だー。」

「男とはー?」

「『愛に』生き、『哀に』生きるもの……。」

「よひしごーーそれではーー F異端審問会をぐへつーー。」

俺はとりあえず持つて来ていた木刀で須川を殴つて異端審問会を強制終了させた

「「余長おおおおーー。」」

「あ、次行こひつ

「…相変わらず容赦ないね」

「では次の方、お願ひします」

「…土屋康太」

……

……

…終わりかい。もつちょい喋らつぜ、康太。

にしてもやつぱり女子はほとんどないな。まあFクラスだし当たり前か

そんな事を思つていると…

「海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。趣味は？」

「あ、女子いたんだ。……」の声だけ聞いていた事あるよつた。

「吉井明久を殴る事です」

美波だな

「誰だつー?恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つ奴はー!」

「まひまひー。吉井、今年もよひしけね」

…美波は本当に明久が好きなのか?

そんなこんなで俺の番

「雑賀佳史だ。趣味は特にない。ちなみに嫌いなものはー」

そこで俺に攻撃体制を取つてている奴らを睨み

「物理的に排除するんでよひしく」

あえて何が嫌いかをいわなかつたからか、田をそらして武器を下ろす

「吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで下さいね」

『ダアアーリイーーンー』

…おえつ

「失礼、忘れて下さい」

：明久、お前いつかコロス

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん…」

『えつ？』

しばらく名前と趣味を言つだけの退屈な時間が続いたので寝ていたが、不意にドアが開いたのでそつちに目を向けた

そこには、こんな所にはいないはずの人物がいた

第一問

『戦国時代において、多くの戦場を渡り歩いた『戦世人』や『風来坊』と称された人物をフルネームで答えなさい』

姫路瑞希と雑賀佳史の答え

「前田慶次郎利益」

教師のコメント

「正解です。雑賀くんは眞面目にやれば出来るので、毎回しっかり答えると嬉しいです」

吉井明久の答え

「前田慶次」

教師のコメント

「惜しいです。ゲームなどではよく慶次と表記されるので気をつけましょ!」

坂本雄一の答え

「佳史」

教師のコメント

「それは雑賀くんですか」

柔らかそうな髪。白い肌。そして大きな胸。

「ちよつて良かつたです。今自己紹介している所なので姫路さんも
お願いします」

「はい、はいーあの、姫路瑞希と申します。よろしくお願いします

…」

姫路瑞希。常に学年上位をキープし、彼女にしたいランキングでも
一、二を争う女子（康太調べ）

「はいっー質問です！」

「あつ、はつ、はい何ですか？」

「何でここにいるんですか？」

聞く人が聞く人なら「つた不愉快な質問だが、これが今のFクラスの総意だ

「そ、その…試験の最中高熱を出してしまって…」

なるほど。納得した

「俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに…」

「待て。お前今何か伏せただろ」

「俺は弟が事故にあつたと聞いて…」

「黙ろうな一人っ子」

「前の晩、彼女が寝させてくれなくて」

「FFF団に彼女が出来たら天変地異が起るのな」

「「「そこまで言つか！？（泣）」「」」

「うみせだ。一人で全部ツツ」「なんだのを評価してほしこへりこだ

「で、では一年間よろしくお願ひします」

顔を赤らめながら空いている席に向かう姫路

なんか小動物みたいで和む

「姫路さんちゅぱいなあ…」

「だったらとひとと呪わばいこのん…」

「むつ、無理だよー姫路さんが僕なんかに興味がある訳無いよー

「…まあ」

「なんでため息!?」

「いや、バカは死ななきや治んねえかと思つてな

「傷付いた!今の言葉は特に傷付いた!」

鈍感つて治るのか?

「あつ、緊張しましたあー…」

偶々俺達の近くに座る姫路。

ちなみに俺は雄一の前で明久の斜め前だ

「あの、姫」「姫路」

明久、言葉遮られたくらいで号泣すんなよ

「はっ、はい！何ですか？えーっと…」

「坂本だ。坂本雄一。」

「よひ、姫路。体調はもつといいのか？」

「あっ、雑賀くんもFクラスだったんですねか？」

「まあな

本当の理由は恥ずかしくて言えない

「それは僕も気になるよ…」

「よ…吉井くん！？」

めっちゃ驚いた様子の姫路。

まあ、好きな奴が同じ教室にいればそつなるわな

「姫路、明久がブサイクですまん」

「フォローにすらなってねえな」

「そ、そんな一日もパツチリしてて顔のラインも細くて綺麗だし…
その、むしろ…」

「まあ、明久に興味がある奴がいるくらいだからな」

「そつ！それって誰ですか！？」

「そう慌てんな。えーっと…誰だっけ雄一？」

「確か久保

利光だつたかな」

「あ、そいつだ」

久保利光。Aクラス。性別、男

「おに明久、さめざめと泣くな」

「大丈夫だつて。半分冗談だから」

「半分！？ねえ！残りの半分は！？」

奴は興味があるんじゃない…ガチだ

「…強く生きるよ、明久」

「僕の身に何が起こるの…？何か怖いんだけど…！」

「はいはい、そこの人達、少し静かに」

ガラガラガラ

「代わりを取つてきますので自習していく下さい」

…さて、寝るか

「雑賀くん、起きて下さい」

「ん…？なんだ…？」

「坂本くんの紹介です。坂本くんに自分の番の時に起こしてくれつて頼まれたので…」

「そうか、ありがと」

礼を言つて前を見ると、雄一が康太の正体をバラしていた
：何故わかつたかつて？康太が必死に首を振つて否定するのは口
関連しかねないからさ

「姫路の事は皆その実力をよく知つているはずだ」

「え？ 私ですか？」

「そうだ、俺達には姫路さんがいる」

「ああ、彼女さえいれば何もいらないな

ツツコまないよ～ええ、ツツコみませんよ～

「木下秀吉だつている」

「演劇部のホープか！」

「ああ、確かアイツ木下優子の…」

残念だつたな！確かに優子は成績良いが秀吉は演劇に入れ込みすぎ
たせいでバカだ！

「当然俺も全力を尽くす

「確かになんかやつてくれそくな奴だ」

「坂本つて確か昔神童とか呼ばれてなかつたか?」

「雑賀佳史だつている」

「雑賀つて確か…」

「思い出した!確かに一年の一番始めのテストで一位になつた奴じやねえか!」

また昔の事を…

「それだけじやない。佳史の別名は…『今孔明』だ

「…なんだと…?」「…

「今孔明つて確かに一年の疑似試験戦争で無敗の軍師じやないか!」

「霧島と久保がいたチームに勝つたアイツか!」

「成績も学年上位一桁台と聞いたぞ!」

「IJのクラスにAクラス級の奴が三人いるつてことか!」

クラス全域に『いけるんじやね?』オーラが漂つ

…でもな~

「それに吉井明久だつている」

シーン

「…やつぱりな

明久はオチだよな

「誰だ吉井って？」

「さあ？」

せっかく上がった士氣が下がる

「ちょ、ちょっと雄一…どうしてそこで僕の名前をだすのさ！僕は普通の人間なんだから…ってどうして雄一も佳史も僕を睨むの…？士氣が下がったのは僕のせいじゃないでしょ…？」

「やれやれ、皆知らないなら教えてやる。コイツは『観察処分者』だ

「…それってバカの代名詞じゃなかつたか？」

名も無きモブよ、グッジョブだ

「ち、違つよ…ちょっとお茶目な十六歳につけられる」

「いかにも、バカの代名詞だ」

「肯定するな！バカ雄一！」

「違うぞ雄一」

「佳史！君だけは信じてたよー」

「ふつ、バカめ

「学園生活不適合者かつ小学校からやり直したほうがいいレベルの学園公認のバカだろ？」

「君を信じた僕がバカだった！」

「真実を伝えただけだが、何か？」

「もういいよ！佳史のバカ！」

「…明久、気を付けるよ？お前のバカは…凶器だから

「うわーん！」

俺のターン、俺のターン、俺のターン、俺のターン

「観察処分者つて確かにファイードバックがあるんだよな？」

「じゃあ、簡単に召喚出来ないやつがいるって事か？」

「『気にするな。どうせこってもいなくても同じような雑魚だ』」

「二人して一字一句ハモらなくとも…」

「さて、さつきも言つたが…不満はないか？」

『大ありじやあ…』

二年Fクラス魂の叫び

「ちょ！？流石に無視は酷いよ！？」

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『おおつーーーー！』

「お、おー」

「姫路、無理にのらなくていいんだぞ？」

その後、明久がDクラスに死者……じゃなく使者に行って殺されかけたりしたが割愛

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応午後に開戦とは告げてきたよ」

「じゃあ先に昼だな。ホレ、明久」

そつ言つて俺は賞味期限切れのメロンパンを渡す

「あ、ありがとう佳史」

「珍しいな、佳史が食料の賞味期限を忘れるなんて」

「まあ偶にほな

「あ、あのー……」

「賞味期限切れって?」

今のお話を疑問に思つたのか、女子一人組みが聞いてきた

「ああ、コイシ普段何も食べやがらねえからな。偶にこいつやつて分けてやるんだ…つい、もうこんな時間か。ちょっと行つてくるわ。」

「あれ? 雑賀ビビリ? 」

「二 A。寮のルームメイト」と云ふ

「ああ、そういうえば雑賀くんは寮住まいでしたね」

文丘学園には学校に寮があるのだが、別に全寮制の学校では無いので、自宅から通う奴の方が多い。

しかし、学校行事などの関係で一応全員が一寮、二寮、三寮に分けられる

あ、ちゃんと女子寮と男子寮に分かれてるからな?

「まあビビリわけだけから、ちよつと行つてくる」

「午後には帰つてこよう?」

「わかつてゐる」

そう言つて俺は屋上を後にした

ガラツ

「将いるか？」

「あれ？ 雜賀くん？」

入り口の近くにいたのは、女子寮にいる工藤だった

「ああ、工藤か。ちようどいこや。忘れもんだつて将にこれ渡して
くれ。」

「なになに？もしかして手作りのお菓子とか？だったらボクも貰つていい？」

一ズルいわよ愛子！それならアタシももううわ！」

「うわあ！」

優子：突然出でるのは止める……

「御生憎様。寮生用の弁当だよ」

「なんだ？」

「んじゃ、そーいう事で…優子？」

帰らつとすると、何故か優子に襟を掴まれていた

「まあまあ、せっかくだから一緒にお面を食べましょ」

「えー…めんどくさい」（一ノ瀬）…ゼビゴンイッシュショサセテクダサイ

その後は優子に連行されて優子、愛子、後藤…？と弁当を食べた

：周囲の視線が痛かつた

まあ、直に開戦だし、その時に憂き晴らしそうか

第二問

『以下の英文を訳しなさい
This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly.
』

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

「正解です。きちんと勉強していますね。」

土屋康太の答え

「これは
」

教師のコメント

「訳せたのはThisだけですか

雑賀佳史の答え

「四、五年前に売つてしましました」

教師の「メント

「アハ～いえ、ば雑賀くんは…すみませんでした」

吉井明久の答え

「 ×」

教師の「メント

「 どちらが地球上の言語で」

○クラス戦が始まった

始まつたんだが…

「何で参加出来ねえんだよおおおーーー！」

「雑賀くん、テスト中ですよ」

「あ、スンマセン」

俺は回復試験を受けていた…しかも全教科。つまりは総合科目のいや、まあ寝てた俺が悪いんだけど、なんかじつ…納得いかない感が…

え？今テストに集中しなくていいのかって？いいんだよ。どうせ保険体育だし。

「…はい、保険体育は終了です。次は現代国語になります

ちなみに今の試験監督は学年主任の高橋女史。さっきまで立会人に駆り出されていたみたいだが、元々の試験監督だった鉄人が「戦死者は補習ううう！」とか言いながら飛び出して行つたので、その代わりで来たらしい

（現代国語終了）

「さて、次は…」

ピンポンパンポン

ん? 何だ?

『連絡致します』

この声は…須川?

『船越先生、船越先生』

なるほど、偽報か。となると雄一の指示かな?

『吉井明久君と雑賀佳史君が体育館裏で待っています』

……は?

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

船越先生 婚期を逃し、ついに生徒に単位を盾に交際を迫るよ
うに
なった + 今の須川の放送 僕と明久の貞操が…

「ふ…」

「さ、雑賀くん?」

何故か姫路が怯えているが気にしない

「高橋先生、先に姫路だけでテスト受けをせいやつて下さー。すぐ戻りますから…」

「ど、どこの行くのですか？」

「いえいえ、ちょっとばかし始末しに：お仕置きしに行くだけ De atchから」

「な、なんか一部発音が…」

高橋先生がまだ何か言っていたが知らない。

そしていつの間にか放送室の前。どうやら怒りで限界を色々突破したらしい

「須川あああああつ…」

「げつ！ 雜賀！ お前何でここに！ テスト中じゃなかつぎやああああああ！ …！」

とりあえず須川を始末した後、再び放送器具をいじる

…どつかせ元凶は… アイツだ！

ピンポンパンポン

《先ほどの放送について訂正致します。船越先生、船越先生、至急、Fクラス教室までお越し下さい。坂本雄一くんから大事なお話があるそうです。婚姻届と実印を持って行つてあげて下さい》

「いいいーーー！」とか言う、ゴコロの声が聞こえたが、俺は知らないよ……

「総合科目テスト終了」

「さあ、姫路行くぞ？」

「あ、はいっ」

今回の俺らの仕事はDクラス代表の撃破。予定だと、姫路が近衛部隊を始末している間に俺が代表を始末することになっている

「お、やつてるな」

「雑賀くん、急ぎましょー！みんながどんどん西村先生に捕まつて
いらっしゃますー！」

「そうだな」

そして代表らしき奴の側に行き、肩を軽く叩く

「ん？ 雜賀に姫路さん？ どうしたの？ Aクラスはこの廊下は通らなかつたはずだけど」

「いやいや、それがな……」

「佳史に姫路さん、後はよろしくね？」

「は？」

「Fクラスの雑賀佳史だ。Dクラス代表に現代国語勝負を申し込む。」

「

「はあ、どうも」

「サモン!」

『Fクラス 雜賀佳史 VS Dクラス 平賀源一』

現代国語 624点 VS 129点』

「え? あ、あれ?」

「悪いな、国語は得意科目だ」

俺の召喚獣が平賀の召喚獣を日本刀で一閃し、Dクラス戦はFクラスの勝利で集結した

「つまおおおおおつ!..」

Fクラスからは歓喜の声が、Dクラスからは絶望の声がそれぞれ響き渡る

「やつぱり坂本は凄い奴だつたんだな!..」

「姫路さん愛します!..」

だから誰だ!..さつきから姫路にアプローチしてる奴は!..?

「あーまあ、なんだ。そう手放して褒められるとなんつーか!..」

その後続々と雄一に握手を求めるFクラスの面々

「雄一！僕も雄一と握手をー！」

「ん？今一瞬明久の手に…

ガシッ

「雄一…どうして僕の手首を押さえるのかな…！」

「押さえるに…決まっているだろ？が…つー！」

カラソカラソ…

雄一が明久の手首をひねると、まさかの包丁が出てきた

「…」

「…今、何をしようとした？」

「もちろん勝利を祝う握手を手首がもげるほどに痛いー！」

「佳史」

「任せろ」

俺はペンチを持って明久の手を握る

「す、ストップ！僕が悪かったー！」

「「ひーー。」

明久の生爪を剥ぐチャンスが…

「まさか雑賀と姫路さんがFクラスだったなんて…」

そんな声が聞こえ、振り向くと、廊下に力無く座り込む平賀がいた

「悪いな。これも戦争だ。」

「わかつて。Fクラスを甘く見た俺達が悪いんだ」

自分の非を認め、しっかりと現実を受け止める平賀。

「イツ案外上に立つ才能があるのかもな

「ルール通りにクラスを明け渡そう。ただ今日はもう遅いから作業は明日でいいか?」

「いや、そんな必要はない」

「え?」

「何でお前が驚いてんだ?」

口クに話聞いてない俺でもわかるのに

「じゃあ佳史はわかるの?」

「どうせ雄一の事だから目標はAクラスなんだろ? こういう事は景気

づけと戦争に慣れさせる為、後Bクラス戦の下準備…だろ?」

「正解だ。流石だな」

「んじゃ悪いが俺もう帰るわ」

「寮の門限はまだじゃないの?」

「いや、行かないと俺の関節が一個増える事に…」

「マジで。冗談抜きで

「明久行かせてやるのじや」

「元々ダメなんて言つてないけどね。じゃあ佳史、また明日」

「おひ

「遅いわよー」

「じゃあ先に帰つとけよ…」

校門の前に着くと早々に優子が怒っていた

「それじゃ意味ないのよ… それくらい気付くなさいよ。バカ」

「何してんだ?早く帰るぞ?」

「待つてー・じつせなひ駅前のワ・ペティスでクレープ食べて帰りま
しょー」

「じつせ嫌つて言つても無駄なんだるつなか

まあ甘いもんは好きだしいいか

「別にいいわ

「やつたー・じやあ佳史の奢つねー

「あー…ちよ、ちよっと待てー・奢るなんて一言も…」

「わあ、レッジゴーー。」

「聞けええええーー！」

その後、じつかりと奢りました

今用の小遣いが…（泣）

第四問

『以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい』

光は波であつて（ ）である

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師のコメント

「よくできました」

土屋康太の答え

「寄せては返すの」

教師のコメント

「君の解答はいつも先生の度肝を抜きます」

雑賀佳史の答え

「宇多田」

教師の「メント

「先生はあの人のファンです」

吉井明久の答え

「勇者の武器」

教師の「メント

「先生もRPGは好きです」

「おせむ」

ういーつ

—あう、一人共。時間ギリギリだな」

偶々廊下で会つた明久と教室に入ると雄一が最後の悪あがきをしながら挨拶してきた

「それより明久、昨日の後始末はいいのか？」

ああ、
そういえばなんか美波が怒り狂つてたな

「ああ、もういいよ。生爪剥がされてまである！」とじゃないし」

いや、俺の始末じゃなくて

なんだ、まだ根に持つてたのか？

佳史に雄一か憎くなしの?」

「既に復讐はしたしな」

ニヤリと笑って雄一を見る

「吉井つーー！」やるのやる

「「」ふあつ……」

「雄一」が切れかけたときに美波が明久にバックキックを喰らわせた…
やべえ、今足が一瞬見えなかつた…

「し、島田さん…」

「アンタ昨日ウチを見捨てただけじゃなく器物破損の罪までかぶせ
たわね…！」

般若の「」とき形相で明久に迫る美波

…明久、強く生きりよ

「おかげで彼女にしたくないランキングが上がっちゃつたじゃない
！」「

「…まあ、同時に彼氏にしたい女子ランキングも上がったんだ
し…な？」

「そのランキング、矛盾しか無いのよ…」

「腰の関節が千切れのように痛ぎやあああああああ…！」

まあ、いつもの事だし置いとい…

「雄一」、お前こんな所でのんびりしてていいのか？」

「へ、どうした事だ？」

「限田の数学のテスト…試験監督、船越先生だぞ？」

「嫌あああああ…！」

「…………」

「おーい、生きてるか雄一ー！」

ちなみに船越先生は明久の近所のお兄さん（？）を紹介して事なきを得たようだ…実に残念だ

「あー…死ぬかと思つた…」

「生きてんだからいいだろ？それより食堂行こうぜ」

「そうだなー今日はラーメンとカツ丼とチャーハンとカレーにすみかな」

本当に疲れてんのか「イツ？？」

「じゃあ僕は贅沢にソルトウォーターでも…」

「お前に塩水すら贅沢と言つよくなつたか…」

明久の言葉に全俺が哀れんだ

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だつたら一緒にいい？」

「別にいいぞ？」

「…………（「ク」）」

康太、下心がみえみえだぞ？

「あ、あの皆さん…」

「ん？ 瑞希？ お前も行くか？」

俺はDクラス戦の最中位から姫路を瑞希と呼ぶよつになつた

本人曰わく、美波を含む皆は名前で呼んでるのに、自分だけ名字だと壁があるみたいで嫌、だそうだ

「違うぞい、佳史。姫路、昨日の約束の弁当じやろ？」「

最近空氣になつつあつた秀吉。

…お前ポニーテールなんかしてたらまた優子に殺されるぞ

「はっ、はい！ 迷惑じゃなかつたひびき…」

恥ずかしそうに弁当を差し出す瑞希

「迷惑なもんか！ ねつ、雄一に佳史…」

「そつだな、ありがたい」

「サンキューな瑞希」

「そ、そうですか？良かつた？」

ほにゃー、と笑う瑞希。コイツはいちいち小動物みたいになるな：癒やされる

「むーつ…瑞希って意外と積極的なのね…」

そして美波はいちいち肉食系女子だな

「それじゃつたらこんな所でなく屋上に行かんかの？」

「そうだな、せっかくの『馳走なんだしな』

「それなら俺は飲み物でも買つてくれる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

珍しく雄一が気の利く事を言い出す

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「！？」

「いや明久、別に美波はお前の命を狙つてないからな？」

明久の中での美波の認識が知りたい

「風が気持ちいいね～」

屋上に着いたらすぐに瑞希がシートを敷いてくれたのをそこにすわる

「あの…あまり上手くはないんですけど…」

そんな謙遜をしながら瑞希が弁当のふたをあけぬし、それに盛り付けられたおかずとおにぎりができた

「　　「おおひーー..」「

「凄いよ姫路さんー塩と砂糖以外の物が入ってるよ..」

「よつ…喜んでもらえて良かつたです…」

明久、瑞希が引いてる引いてる

まあ、明久の事だからリアルにそんな食生活なんだろ?な..

だから寮で暮らせばいいんだ

「吉井君や皆に栄養をつけでもらおうと思つて張り切つたもーめしまつ

ここやかに笑う瑞希…本当に出来た娘だ

「姫路はいい嫁さんになつたわ~の~」

秀吉は優子よりはこい主夫になつただな

しつかし……なんか忘れてるよ!」

「じゃあ、早速このHビフライを……」

ヒヨイ

なんだ?何か物凄く重要な事だったような…

「あつーーーする!」ゼムツツリーーーー!」

…一年のとき…家庭科…調理実習…………はつーーー

「待て!康太!ーーー!」

パクッ

ゴツ!

ビクンッ…ビクンッ…

「「ーー?」」

くつ…遅かったか…!

康太は正座のまま真後ろに頭をぶつけ、まな板にのせられた鯉みた
いに痙攣している…

「わわつーー?土屋君ーー?」

姫路に声をかけられるやいなや康太は根性で起き上がり、姫路にむけてサムズアップする

…あつと、『凄く美味しいぞ』って言いたいんだろうが…足が生まれたての小鹿みたいに震えてるぞ…？

「皆やんどんどん食べて下さいねー！」

もつテフオルトで笑つてんじゃねえかつて皿つくりこキラキラした笑顔の姫路…今は悪魔にしか見えん

（ぐつ、間に合わなかつたか…）

（ねえ一人共、さつきのムツツリー！ビリビリ？）

（…どう考えても演技には見えん）

（アウトだ）

（だよねヤバいよね…）

（ヤバいなんてもんじゃねえ。一年のときに家庭科の調理実習で姫路の作ったポトフを食べた奴全員ぶつ倒れた）

（…マジで…）

マジだ。そして未だに原因不明だ

（明久、佳史、お主ら身体は頑丈か？）

(正直胃袋には自信ないよ。食事の回数が少なすぎるから…)

（俺もだ。割と飯抜いたりするからな…）

ちなみにこれまでの会話中俺達はずつと笑顔である

アイコンタクトって便利だね！

(…なまけ者でもあります)

(そんな！危険だよ！)

(早まるな秀吉！)

（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋でな、ジャガイモの芽を食べた程度ではビクともせん）

いや、お前確かその後一週間下痢だつたよな！？

(安心せいい、ワシの罠袋を信じて…)

「待たせたな！」

秀吉が見た目に反して男らしいセリフを言おうとした時、雄一が戻ってきた

「へえ、こりや 美味そうじやないか。どれどれ…」

「あつ！待て雄一！」

「ん？」

パクッ

ガツ！

カラカラカラカラ…

「さつ、坂本！…ちょっとビビったの…？」

雄一が倒れた時に散らばった缶の音がやたらと響く…

間違いない、本物だ…

あの雄一ですら卒倒かよ…瑞希、恐ろしい娘！

(…毒を盛つたな?)

(毒じゃないんだ)

(…瑞希の、実力だ)

「あ、足が…つってな…」

…さつとも思つたがそこまでして瑞希を庇う必要があるか？

「…は心を鬼にして…」

「なあ、瑞希、IJの弁当…」

「ああっー姫路さん！アレは何だー！？」

「えつ？」

「もがつー？」

そして何かが俺の口の中に入った瞬間、意識がブラックアウトした

第五問

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『C₆H₆』

教師のコメント

簡単でしたかね

土屋康太の答え

「ベン+ゼン=ベンゼン」

教師のコメント

君は化学をなめていませんか

吉井明久の答え

『B E N Z E N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るよ!

雑賀佳史の答え

「じゅうじゅう…だったような違ったような…」

教師のコメント

何故うる覚えなんですか？

…あと、坂本君と協力して吉井君と十畠君を生活指導室まで引きずつてでも連れていって下さい

「せついいえ坂本、次の目標だけど」

「試召戦争のか？」

現在、帰つて来た美波と還つてきた俺、雄一、康太を交えてミーティング中だ

あの後、どうやら雄一がデザートを処理せられたらしい

「うん。相手はBクラスなの？何度も聞いてるけど目標はAクラスじゃないの？」

まあもつともな質問、だろ？。Aクラスが目標だと宣言しているのにいつまでも攻めないのは不安になる

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てない」

常識に考えてそりゃ そうだ。

まず点数の違い。雑兵どもはともかく、優子を含むトップ10…まあ瑞希と俺がこいつにこるからトップ8か。コイツらは俺か姫路でサシでやって勝てるかどうか…代表の霧島に関しては全力でやって勝てるかどうかだ

「どんな作戦でも必ず俺か瑞希が出る事になる…そりゃ霧島を倒すなんざ夢のまた夢だ」

「それじゃ最終目標はBクラスに変更つて事?」

「いや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄一、それじゃそりゃあいつがいる事が違つじやないか」

たまらず明久が口を挟む

「違わねえよ。いいか明久?普通にやって勝てないなら勝てる状況を作り出せばいいんだ」

「佳史の言う通りだ。クラス単位では勝てないだろう。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

「そりゃ、だからBクラスを攻めるんだね」

明久にしては勘がいいな

「でもどうやって一騎打ちに持ち込むの?」

前言撤回。やつぱりバカだ

「Bクラスを使う。明久、下位クラスが負けたら設備はどうなるか知っているな?」

「えー?えーと…設備を一つ落とされるんだよー。」

…瑞希に助けてもらつたな

「そうだ。つまりBクラスならCクラスの設備になるわけだ」

「そうだね常識だね」

「…の口がぬかるすよ

「…では上位クラスが負けた場合は?」

「悔しい」

「ムツツリーー、ペンチ」

康太が頷いて雄二にペンチを渡す

「僕を爪きり要らずの身体にする動きがつー?」

…はあ

「雄二」

「佳史!信じてたよ」

そうかい。俺は…

「やり方が甘い」

お前を潰す予定なんだがな

常に持ち歩いている木刀を取り出す

「更に状況が酷くなつた！？」

「相手クラスと設備が入れ替わるんですよね？」

瑞希が明久にフォローを入れる

…チツ、瑞希に感謝しろよ

「そのシステムを利用して交渉をする。Fクラス設備になるよりは
マシだらうからな。まず上手くいくだらう」

「『Bクラスが攻めた直後に攻め込む』とでも脅して交渉すればま
ず応じるだらうな」

振り分け試験直後の今、クラスの差は点数の差だからな

「じゃが、それでもAクラスが交渉に応じるじゃんつか？」

「そこいら辺は大丈夫だ」

…生贊もいることだしな

「とにかくBクラスをやるぞ！細かい事は後回しだ」

「まあ、考えがあるならいいけど……」

「でだ、明久」

「断る」

「おお、いつになく反応が早い

「……いい、雄一、俺が行こ」

「ん？でもお前に何かあつたら……」

「僕はどうなつてもいいのか！？」

「心配するな。ちょっとBクラス代表に用があるだけだ」

「ねえ無視！？」

「うるせえ！」

「げふつー？」

「なんと書つか…哀れじやの…」

「……同感」

明久を黙らせた後、俺はBクラスに向かった

「よお、根本はこるか?」

Bクラスのドアを蹴り開けて中の奴らに聞く

「あ?何の用だ?」

「…FクラスはBクラスに試合戦争を申し込む。…覚悟しつけ。明日の昼から開戦だ」

それを聞いた奴は嫌らじい笑みを浮かべて

「へえ…最低クラスがわざわざ負けにくるのか。『苦労なこと』で」

「言つてみ。じゃあな」

俺は「ほんの少しでも胸ぐれ悪いのでそのまま帰りますが…

「まあ、待てよ。もう少しあとゆっくりしてこつてもいいんだがな
いか?」

根本が手を上げると、何人かの男子が俺を取り囲む

「やれやれ…手を出せなきゃ見逃してやるつと困ったんだがな…

「どつちの立場が上かわかつてこるのか?…お前ら…やつてしまえ

!」

「…まあ」

面倒くせえな

「…で？もう終わりか？」

俺の足元にはBクラスの男子の死体（違）が大量に横たわっていた

「そ、そんなバカな…」

「もういいか？さつさと戻りたいんでな。…じゃあな、『卑怯者』」

「…くそつー」

そうして俺は悠々とBクラスを去った

第六問

『上方置換法と下方置換法について説明しなさい
また、置換法をもう一つ書きなさい』

姫路瑞希の答え

「上方置換法は空気より軽い気体を、下方置換法は空気より重い気体を集めるのに使う
置換法…水上置換法」

教師の「メント

「正解です。空気の重さについて勘違いする人は多いのですが、よくできました」

島田美波の答え

「セクハラです！…」

教師の「メント

「痴漢ではなく置換です。確か島田さんは帰国子女でしたね？漢字についても勉強してください」

土屋康太の答え

「上方置換法」…胸

下方置換法」…尻

他の置換法」…車上痴漢法」

教師のコメント

「呆れを通り越して清々しいです。
…解答の血痕は土屋君のですか？」

翌日・昼休み

「さて、皆。午後はBクラスとの試召戦争に突入するが殺る気は十分か？」

Г Г Г Г Г Г Г Г

Fクラスに野郎共の声が響きわたる

顔には出さないが、俺もこの戦争は殺る気十分たつたりする

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為開戦直後の渡り廊下戦は絶対負けるわけにはいかない

「がつ、頑張りますっ」

任せろ、大将

一
野郎共！きつちり死んで来い！」

卷之三

相変わらず単純な奴ら

キンコーンカーンコーン

何とも絶妙なタイミングでチャイムがなる……雄一め、狙つてやがつたな

「よし、行つてこい！……田嶋すはシステムテスクだ！」

「いいな野郎共… Bクラス、出陣るぞ…」
で

「「「「しゃあ——————」」」

雄一が「ちょ、俺のセリフ…」とか言つてたのは気にしない方向で

「いたぞ！Bクラスだ！」

俺達は数学、英語W、物理を武器にBクラスに突っ込む

理由はBクラスは文系が多いのと、数学の長谷川先生は召喚範囲が
広い（原因不明）からだ

「大丈夫か？瑞希」

「は…はい…」

ほんのちょっと走つただけなのに瑞希は息も絶え絶えだ

…流石に身体弱すぎないか？

「生かして帰すなーっ！」

おひと…戦闘が始まつたか

「瑞希、ちょっとペース上げるが」

「はーっー。」

俺らが着いた時には…

Bクラス	野中長男	VS	Fクラス	近藤吉宗
総合科目	1943点	VS	764点	

Bクラス	金田一祐子	VS	Fクラス	武藤啓太
数学	159点	VS	69点	

Bクラス	里井真由子	VS	Fクラス	君島博
物理	152点	VS	77点	

…うん、絶望的だね

…「ゴメン、自分でもキモかつた

「お、遅れ、まし、た…。」め、んな、せい…」

「いや、マジで大丈夫かお前？」

瑞希のあまりの体力のなさに少し心配になる

明久も瑞希を心配して近寄つてくる

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスのモブーが叫ぶ。流石に瑞希の存在はバレてるか

「隣は雑賀佳史だ！油断するなー！」

あらり、俺もバレてんのかよ

「瑞希、じ指名だ。行くぞっ！」

「姫路さん、来たばっかりで悪いけど…」

「は、はい。行つて、きます」

トタトタと戦場に入つて行く瑞希。

なんか…和むわ…優子とは大違ひだ

勿論俺も指名（笑）されてるので瑞希と一緒に前に出る

そして瑞希は数学の、俺は英語Wのフィールドに入った

「山田先生！Bクラスの香川です！雑賀君に勝負を挑みます！」

「私も行きます！」

「私も！」

Bクラスの女子三人が山田先生に召喚許可を求め、承認される

「 「 「 サモン！…」 」

「 サモン」

女子三人の召喚獣はそれなりの装備で、全員西洋剣だった

対する俺の召喚獣は、和服で袴に男用の着物、上に長めの黒い羽織りを羽織つて帯を締め、野太刀と小太刀を装備している

Bクラス	香川幸	&	三代玲奈	&	西川歩
英語W	175点	&	203点	&	188点

流石文系。それなりに点数が高い

「佳史くんならやられてもいいかなって思つたけど…

「案外弱そうね」

「…おいおい、人を見かけて判断すんなって習わなかつたか？」

「 「え？」 」

ザシュー！

次の瞬間には、香川と西川の召喚獣は戦死していた

Fクラス 雜賀佳史

英語W 443点

「そ、そんなの勝てるわけ無い！！」

「悪いな、これが戦争だ」

「コッと三代に笑いかけ、召喚獣にトドメをさす

「〇点になつた戦死者は補習……」

『じゅーしょーさまー

横を見ると、瑞希も敵を倒したようで、みんなの方を向いて

「み、皆さん頑張つて下さい！」

その一言で湧くFクラスメンバー（バカ共）

今田も順調に瑞希信者急増中

「…さて、瑞希。後明久と秀吉も。ここには須川に任せて一旦教室に戻るぞ」

「え？ 何で？」

明久が疑問を口にする

「Bクラスの代表はあの根本だ」

「根本つて……あの卑怯者で有名な根本かの？」

「ああ。何をれるかわからんし、雄一が危ないかも知れんからな」

そこで俺達はクラスに戻ることにした

「……つわ、こりゃ酷えな」

教室に戻つてみると、卓袱台はボロボロにされていて、シャーペンは折られ、消しゴムは千切られていた

よつするに設備を破壊されていた

「これじゃ補給がままならないね」

「地味じやが点数に影響の出る嫌がらせじやない」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが作戦に大きな支障はない」

明久と秀吉と話していると、雄一が教室に入ってきた

「雄一……お前どこに行つてたんだ？」

今教室に入つて来たんだから壊されたのはその間だろ？

「協定を結びたいと言つ申し出があつてな。調印のために教室を空

にしていた

「協定?」

「ああ。4時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして手続きは明日午前9時に持ち越し」

それだけならいいめちゃくちゃ有利だな。姫路の体力的に

「その間は試合戦争に関わる一切の行為を禁止するってな」

「…何だと…?」

「ん? ビリしたんだ佳史?」

「お前…もしさとは思つが調印してないよな…?」

「いや、ついに都合のいい条件だつたから合意したが」「このバカ野郎!…」「は?」

「け、佳史! 一体ビリしたのさー?」

「落着くのじゃー」

明久と秀吉に止められてよつやく落ち着く

「…悪かったな。ついカツとなつた…」

「いや、いい。それより何でんなに怒つたんだ?」

雄一は懐が深いな

「…もう一度聞くが条件の一つは『試合戦争に関する一切の行為の禁止』であつてるな?」

「ああ」

やつぱりか…」つやちゅうと雲行きが怪しくなつて来やがつたな…

「…なら、明久。お前なら試合戦争と聞いて何を連想する?」

「え?えーっと…勉強とかノートイングとか…痛いとかかな?」

「最後のはお前だけだがその通りだ」

「おこ、おやか…」

「なるほど、やはり卑怯者じやな」

「どうこいつ」と…

明久以外は理解出来たようだ

「いいか明久?つまりは4時を過ぎてからの補給テスト、作戦会議、今なら教室の補修、勉強道具の調達は契約違反だ」

「下手すりや勉強そのものや教室でだべつてる」と、究極的に言つなら学校にいること自体が違反対象だ」

「そんなんひやへひやな…」

「めちやくちやでも屁理屈でも反論出来なけりや立派な論理だ。ようするに雄一のバカが調印結びやがつたせいで現況はかなり不利だ」

「…すまん」

流石に雄一も悪いと思つたのか素直に謝る

「過ぎた事は仕方ない。さつさと対策を考えて」「大変だ！」

ちょっとシリアスな雰囲気になつていると、須川が教室に駆け込んできた

「どうしたの？須川君」

「島田が人質にとられた」

…わお。命知らずな

「なつ…？」

「…とりあえず状況が見たいな。須川、案内頼めるか？」

「任せてくれ。いっただ！」

「雄一」

「わかつてゐる。対策は任せてくれ。一度同じ轍は踏まん」

「頼んだ…明久、行くぞ！」

「うん！」

にしても人質ねえ……卑怯つてクラスに伝染すんのかな？

「島田さん！」「美波！」

「吉井！佳史！」

「……」の二流ドラマってシッコ!!はいれないので…

「……残りは一人だが人質で攻めるに攻められないって所か」

「申し訳ないが、その通りだ」

つーか鉄人。呆れるくらいなら止めろよ

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺してこの女を補習室送りにしてやるぞ！」

……一人しかいないうちの女子を戦死させて同時に士気も落としきつて魂胆か？

それなら…

「「総員突撃用意いーつー」」

「隊長達それでいいのかー?」

いいんだよ。…明久は日頃の仕返しとか考えてそうだけど

「ま、待て吉井!」コイツがどうして俺達に捕まつたと思つてね?」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

「うおう!/?美波から凄まじい殺氣が!/?

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら一人で保健室に向かつたんだよ」

そりや好きな奴が怪我したって聞いたらな…

「島田さん…」

「な、なによ…」

ちょっと顔を赤らめてそっぽを向く美波

なんだ?『テレ期か?』

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんてアンタは鬼か!」

「違つわよー」「違うだろー」

「コイツの頭の中を一回覗いて見たい

「ウチがアンタの様子を見に行つちや悪いってのー? これでも心配したんだからね!」

「島田さん。それ、本当?」

「明久、何でお前は素直にそいつ考えられないんだ…?」

「そ、そりよ。悪い?」

「コイツまでやれば流石に明久も…

「へっ、やつとわかつたか。それじゃ大人しく…」

「総員突撃いーつ!」

「「何で(だ) よつ!?」

わからなかつたようだ

「あの島田さんは偽物だ! 変装している敵だぞ!」

何をどう考へてそりなつた

「おい待てつてー! コイツ本当に本物の島田だつて!」

『メンBクラスの奴ら。コイツ本当に本物のバカなんだ

「黙れ! 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ!』

Bクラス 鈴木一郎 & 吉田卓夫 VS Fクラス 田
中明 & 須川亮
英語W 33点 & 18点 VS 65点 & 59点

…死にかけだつたのか

「ぎゃあああーーー！」

「たすけてえーーー！」

おつかれーっす

さて、問題は…

「皆、気をつけろ！変装を解いて襲いかかってくるぞーーー！」

明久が生きて帰れるかどうかだな

…ま、フォローへりいはしてやるか

「美波、大丈夫か？」

「佳史い…」

あの美波が本氣で泣きそつになつてゐるよ…そんなにショックだつたのか

「佳史！危ないよー！」

「何言つてんだ?」「イツ本物だぞ?」

「…く?」

一瞬で気の抜けた表情になる明久

「イツ…今俺に合わせればどにかなつたものを…

「美波、教室に戻ろうか?」

「うえーん!佳史ーー!」

マジ泣きしながら俺の腰に抱きついてくる美波

…田頃とのギャップが激しそぎだろ

「うえーん…」

「あー…はいはいよしよし」

俺と美波はポカーンとしている明久達を置いて教室に戻った

因みにFFF団はキレた美波の恐るしさを知っているため、肅正どころか、後で崇められた

「あ、美波」

「…何?」

「一応これ自習中のクラスには戦闘以外は生中継だからな?」

「……え、」

「その頃のAクラス」

「…………」

「ゆ、優子さん? どうしたんですか? 何かどす黒いオーラが出てますけど……」

「なあに美穂? アタシはいつも通りよ~そ~イツモドオリ~フフフフ」

「何でカタコト! ?」

「……ねえ代表? どう思つ? ボクが思つ」

「……多分愛子の考えが正解。私も雄一があんな事してたら……」

「あれ? 代表Fクラスの代表くんが好きだったの?」

「…………うん」

「佳史い…オボエテナサイヨ? …」

「誰か止めて……」

「（ブルツ）…何だ今のは寒氣！？」

「佳史どうしたの？」

「いや、大丈夫だ」

ちなみに俺が教室の設備を補修している間にCクラスが敵になつたらしい

P.S 明久と美波が仲直りしました
…後、何故か俺のファンクラブが出来たらしいです

「さて、帰るか

「そうだね」

時間も時間なので俺達が帰るうつとしていたとき…

ガラツ

「佳史いるかしら？」

「ん？秀吉？女装なんてしてどうしたの？」

「明久よ、ワシはいつちぢや」

うん、お約束ですな

『ムサシノヒメ』

「ちよつと来てもらいたいのかな？」ガシツ

え？お願いなのに拒否権ナシですか？

一 やあ、お

「ちょ、待つ……！秀吉！助けてくれ！」

「姉上……流石に「秀吉?」(ニコニ)」……すまぬ、ワシは無力じゃ……！」

「ハセー、諦め早すぎるだろー。だつたら雄一ー。」

「佳史…諦めて逝つてこい」

「雄
—
い
い
い
い
ー
つ
！
！」

仕方ない。短い人生だつたと諦めよう。

「みんな… 生きて帰れたらまた明日弁当食おうな…。」

「へつ……住史、お主の事は忘れぬぞ……」

「アンタ達の中でアタシはどつなつてゐるよーー。」

そしてそのまま俺は連れていかれそうに…

「つて待て待て！ 買い物でも何でも付き合つてやるから関節技だけは勘弁して下さい…」

ピタッ

「何でも…？」

「今なら大体は！」

何物も命には代え難い！

「じゃあ…賭けをしない？」

「賭け？」

そんなんでいいのか？

「そ。どうせ最終目標はAクラスなんでしょう？ だつたらFクラスが勝つたらアンタの勝ちでAクラスが勝つたらアタシの勝ち。負けた方は勝った方の言つことを何でも（・・・）一つきべ」と

何でも…つてめちゃくちゃヤバいんだが…主に俺の貞操と人生が

昔から、コイツは何故かやたらと俺の寝床を襲つてくれる

だから毎年寮が閉まる長期休みの木下家への居候はかなりデンジャラスだ

「…勝てばいいんだな？」

「やうよ

「…わかった」

つーか今の俺に指示権ないし

「ホント？嬉しいな」

「つけは泣きたいよチクシヨー

と、言つことで俺と優子の賭けは成立した

第七話

『日本独自の技術で、円の動きを取り入れた、主に護身術として使われる武術を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『合氣道』

教師の「メント

「正解です。姫路さんも体を鍛える意味でも留つてみてはどうでしょう?」

木下優子と島田美波の答え

「関節技」

教師の「メント

「武道じゃありません」

雑賀佳史と吉井明久の答え

「... 関節技」

教師の「メント

「間違いです。…しかし何故君達の答えから哀愁を感じるのでしょ
うか？」

土屋康太の答え

「四十八手」

教師のコメント

「そろそろ西村先生と大島先生に徹底的指導をお願いしておきます」

「昨日書いた作戦を実行する」

朝のホームルームが始まるなりそんな事を言い出した雄一

「作戦？」

「Cクラスを敵にしない為の作戦だ」

「そりゃ」

…何故俺の冷や汗が止まらないんだろうか

「それで何すんの？」

「秀吉コマイツを着てもいい」

そう言つて雄一が紙袋から取り出したのは文田学園の女子生徒の制服

オトナのお友達にも大人気の代物…らしい（ムツツリ商会調べ）

…雄一、お前ついにそんな趣味の方向に…

「佳史、そんな目で見るな。地味に傷つく。後俺にそんな趣味は無い

い

「それは重畠」

「別に構わんがそれでどうするんじゃ？」

いや、構え！（俺が）優子に殺される！

「つひ待て！もしかして作戦つて…」

そこまで言つと、雄一はニヤリと笑つて

「やつだ。秀吉こは木下優子としてAクラスの使者を裝つてもいい」というわけで秀吉、用意してくれ

「ひむ」

「ちょ、待て秀吉！考へ直せ！優子に『ころムグウ！？』

一瞬で明久と康太に口をふさがれる

「……佳史、これだけは邪魔させない……！」

「クラスの為なんだ。…諦めてよ」

その後すぐに康太にスタンガンをくらいい、意識を手放した。

「……は一人で頼むぞ秀吉」

む……ここは…

「あ、佳史、目が覚めた？」

「明久、……ここは？」

「……じクラス前」

「なにい！？」

「静かにしろ。秀吉が教室に入るぞ」

「静かになさこつ、この薄汚い豚どもー」

「静かになさこつ、この薄汚い豚どもー」

ああ…終わった…

もつすでに震えが止まらない…

「な、何よアンタ！」

「話しつけないでー豚臭いわー！」

「なんだよ、もつしち ハリビリひじかねーよ（投げやつ）

「アンタ△クラスの木下ね？ちょっと点数良いからついに気がなつてるんじゃないわー！」

そーですね（ 適当）

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわー！」

「なつー言つに事欠いて私達には△クラスがお似合いですつてー？」

△クラスは豚小屋じゃねえぞ？…多分

「手が穢れてしまつから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送つてあげようかと思つた」

秀吉の野郎、間違いなく口頭の恨みも込めてやがるな

「ちよつじ試合戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるからー。」

あはは…終わった。終わったよ…俺の人生…

「これで良かつたかの?」

めちゃくちゃスッキリした声の秀吉が近づいてくる

「ああ、素晴らしい仕事だった」

何でこんな事になつたんだろうな…

「…ん?ちよつと雄一! 佳史が某ボクサーみたいに真っ白なんだけ
ど!?」

「何!-? 急いで起こせ! 佳史は今回の戦争には必須だ!」

「了解!」

「クックック…」

そつかあ、あの卑怯者が卑怯な作戦たてやがつたせいか?

「……スタンガンが効かない

「隊長! 佳史が笑い出しましたースタンガンも効きませんー」

「根本…」

「え？」

「根本……」「ロス……」

俺の命を窮地に陥ひせた罪……あひつけじ晴らしもひつかひ……

「……」「……」「……」「……」「……」

「……ねえ、雄一」

「……何だ」

「僕達、なんか田原めさせへこけないモノを起つてやつたんぢや……」

「……ぬいがな」

「……反撃」

「アマヒ壁をつまへ使つさじやー戦線を拡大せらるでなーぞー。」

廊下に響く声が響く

あの後Bクラス戦が開始され、Bクラス前で膠着状態になつてゐる

雄一が俺達に課した作戦はただ一つ

『敵を教室内に閉じ込める』

その作戦に従い、教室前を包囲しているのだが…

「…………つー（オロオロ）」

瑞希の様子がおかしい

「右側出口、押し込んだ！」

「ホウキを使って完全に封鎖しろ！三、四人掛けてもいいから絶対に開けるな！」

これで俺が左側を張れば問題ない

しかし、あの慌てっぷりは気になるが…

「Bクラス吉野が現国勝負を申し込みます！」

「雑賀佳史が受ける！」

まあ、そつちは明久に任せよつ

Bクラス 原田芳樹 VS Fクラス 雜賀佳史
現代国語 0点 VS 218点

「はあ…はあ…」

もう何人倒しただろうか。十人を超えたあたりから数えるの止めた
しな

「本隊が来たぞ！」

「大丈夫か佳史！？」

「遅えよ…死ぬかと思つたっての」

「ちょっとと『冗談混じりで悪態をつくと、雄一が小さな声で

「なんとか3時まで耐えてくれ。そうすれば俺達の勝ちだ」

「…しゃあねえな。やってやるよ」

現在、2時55分

ドオオオン

「お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集ま
りやがつて…暑苦しいことこの上ないつての」

Bクラスから腹立つ声が聞こえてくる

「どうした？ギブアップか？今なら罰ゲーム2つで許してやるぞ～？」

根本を挑発しながらまた一人倒す。とうとう現国が200点をきった

ドオオオン

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだし、雑賀はそろそろ限界みたいだぞ？」

…やっぱり「イツが瑞希になんかしたのか

「…お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくぞ」

「俺が限界？冗談抜かせ。その内味方がいなくなつて焦んなよ？」

とは言つたものの割とヤバい。せめて教科が変更出来ればいいんだが…

「はっ、口だけは達者だな！負け組代表さんよ～！」

「負け組？それがFクラスの事ならもうすぐお前が負け組代表だな」

ドオオオン

「… もうつきかからひどいひつるせえな。何かやつていいのか？」

「どうだろな？人望人気信頼信用が一切ないお前に対する嫌がらせじやないか？」

ついに残り100点をきつた。

… 急げ明久！

「けつ、言つてゐる。どうせもうすぐ決着だ。お前らー・さつと雑賀をやつてしまえ！雑賀さえやれば後は雑魚だ！」

「……態勢を立て直す！ 一旦退くぞ！」

雄一の言葉に一瞬疑問符が浮かんだがすぐに切り替えてBクラスのやつを戦死させ、すぐさま召喚範囲から抜ける

… 残り68点。ギリギリだつたな

「どうした！ 散々ふかしておいて逃げるのか！」

三十六計逃げるに如かずつて昔の偉い人が言つてたのをしらんのか？

「「後は頼んだぞ、明久」」

3時ジャスト！！

「だああーつしゃあーつ！！！」

ドガアアアン

明久達奇襲部隊がBクラスの壁を破り、根本に特攻する！

「今だ！全員反転！Bクラスの奴らを一人残らず足止めしろ！」

「Fクラスの雑賀佳史がBクラス近衛部隊全員に古典勝負を申し込む！」

「承認します」

Bクラス	近衛部隊	× 6	VS	Fクラス	雑賀佳史
古典	平均 168 点		VS	688 点	

「なつ！？」

「まだあんな切り札を！？」

俺の点数を見てざわつく近衛部隊

「俺の一番の得意教科は古典なんだよ！……まあ、何はどうあれ…」

「ムツツリー——イ——！」

そんな声が聞こえたと思うと、康太が根本を強襲していた

「…THE END。戦争終結だ

Bクラス VS Fクラス

「うう…痛いよウ、痛こよウ…」

当たり前だらう。素手でコンクリ壊したようなもんなんだから

「明久、なんともお上うしい作戦じゃったな」

「で、でしょ? もうと褒めてもことと悪ひよ~」

何を調子乗つてんだコイツは

「後の事を一切考えず、自分から退学への階段を上る、男氣溢れる
素晴らしい作戦だな」

「やの通つじや」

「…遠まわしにバカつて言つてない?」

堂々とバカつて言つてますが何か？

「ま、それが明久の強みだからな」

なんといつ不名誉な称号！

「… わて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といふか

「だつてよ。な、負け組代表サンよお？」

「……」

さつきまでの態度が嘘のように床に座り込んでいる根本

ま、自業自得だな

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやうんでもない」

雄一の言葉にBクラスFクラス問わず騒ぎ始める

「落ち着け。俺達の目標はAクラスだろ？ 通過点で満足すんな」

「せうじゅのひ」

「まあ… Bの代表次第だけどな」

直にFクラスの皆は静かになる

「… 条件はなんだ」

「条件？それはお前だよ。負け組代表さん？」

「俺、だと…？」

「ああ。お前には好き勝手やつてもらつたし、正直去年から田障り
だつたんだよな」

「俺の死因を作り上げやがつて…！」

周りのフォローは一切ナシ。流石嫌われ者

「そこ」でBクラスに特別チャーンス！』

「Aクラスに行つて試合戦争の準備が出来てると宣言して来い。そ
うすれば今回は設備に関しては見逃してやるつ。ただし宣戦布告は
するな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「…それだけでいいのか？」

むしろそれだけで済むと思つてんのか？

「ただし…Bクラス代表が「コレを着て言つた通りに行動すればな！」

俺が取り出したものは女子の制服（秀吉使用済み）

「これはわざと雄」と考へた罰ゲームだったりする

「ば、馬鹿なことを言つなー」の俺がそんなふざけたことを「つべ
こべ言わんと着とけっー」あべしつー！？」

某キャラクターのように崩れ落ちる根本

「Bクラスの野郎共！（根本を）やる気は十分か！」

「　　おおおおーつー。」「

「…佳史、容赦ないね」

「……不憫」

何のことやら

「さて、俺はそろそろ帰るわー。」

「お疲れ様、佳史」

「明日はAクラス戦だからな。遅れるなよ？」

「…雄一、お前何言つてんだ？」

「ん？」

「…これは本気で忘れてやがるな

「明日は寮対抗の球技大会だぞ？」

「　　え、」

「全員忘れてたのかよ

キャラ設定

あ主人公

雑賀佳史

サイカ

ケイジ

2 F

本作の主人公的存在。基本的に冷静沈着…というよりただのローテンション（低血圧・低体温・低血糖）。

頭は霧島翔子より少し上位。実質学年主席だが、目立つのが嫌いなのであまり本気を出してテストをやらない。

明久とは小学校の時のお隣で、木下姉弟とは中学校からの付き合い。親が木下家とかなり仲良しで、優子は佳史に惚れている。料理上手で、和食は高級料亭で出せるレベルである。

得意教科：古典（600～750）現国（450～500）

苦手科目：保健体育（～5）

その他は平均して380～420

召喚獣

真っ黒なコートに大小二本の刀を腰に差している（バ○ラの片倉小○郎のコートが黒、顔がテイルズのク○トス）

腕輪：？？？

オリキャラ

風祭将

カザマツリ ショウ

2 A

佳史とは中学校からの付き合い。佐藤美穂と幼なじみで、主に相棒的な存在になっている

ノリがいいが、女癖は悪い（寮長の影響）

オリキャラなのにあんまり出番が来ない不憫なキャラ

得意教科：保健体育（460～480）、物理（350～450）

苦手科目…なし

その他の平均…320～360

召喚獣

カンフー服に鉄板が着いたような服にトンファー（顔はまんまりボーンのディー〇）

雜賀唯

長月幼稚園年長

佳史の妹。佳史が高一の時まで佳史と一緒に暮らしだった。

現在は木下家で預かってもらっている

ずっと貧乏な生活を送っていて、一人の時間が多かったせいか、ワガママや駄々をこねるなどは全く言っていない（佳史にはたまに見せる）

かなりのブラン

原則として文月学園の生徒はいずれかの寮に所属する

寮の説明

イケバラと同じく三寮体制

寮長も原作と同じく

一寮：天王寺恵（3 E）

二寮：難波南（3 B）

三寮：オスカ－・M・姫島 姫島正夫（3 A）

長期休みには寮は一時閉鎖となる（帰省を促すため）

部屋は基本的に一人部屋となる

寮対抗のイベントはぶつ飛んだものも多い

寮対抗のイベントのみ、学園長の言つ事は絶対

第八問

『good及びbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

「good better best
bad worse worst」

教師のコメント

「その通りです」

雑賀佳史の答え

「good better best
bad worse worst」

教師のコメント

「真面目に答えてくれて先生は嬉しいです」

吉井明久の答え

「good gooder goodest」

「明久の答えは俺が教えました（笑）」

教師のコメント

「前言撤回します。人を使って微妙にボケないで下さい」

土屋康太の答え

「bad butter bust」

教師のコメント

「『悪い』『乳製品』『おっぱい』」

現在、2寮のメンバー（学年は関係ない為全員）が寮の食堂に集まっている

俺は雄二、霧島、優子と固まつて後ろの方で見ている

…いや、普通に暑いんだよ

「おひしーお前らー今年も来たぜ！」の季節が…。」

『イヒーイー…』

「今年の優勝商品は…」

『ゴクリ…』

「優子、去年は何だつた？」

「えーっと…確かに各部屋にマッサージチアじやなかつた？」

いや、聞いてんのに聞き返されねても…

つか賞品何か聞き逃した

「今年の種目は男子がサッカー、ドッジボール、女子がバレー、ボルトテニス、んで、男女混合でバスケだコノヤローー。」

『うおおおおー…』

めうちゅくめうちゅく湧く男子

…JRのちの氣も知りゅー…

(…わかつてゐな佳史?)

(ああ…)

((バスケ以外を引くぞーんでも翔子(優子)から逃げるー。))

寮イベント限定の同盟発動!

「いいな…じうせ種田は早い者勝ちだ。だから…」

ガシツ×2

「「…あり?」」

「さーて、私達はバスケに出るわよ」

「確定!/?確定ですか!/?」

「……雄一。一緒にやないとダメ」

「ちよつと待て!俺はサッカーがいざやあああああーー。」

反論、ダメ。絶対。

だつて霧島も優子も何故かスタンガン持つてんだもん

「…雄一生きてるか?」

「…なんとか」

男つて…無力だ…

「ちなみにだが…」

そんな風に何もかも諦めて大人しく引きずられていたと、突然天井から掲示板的なものが降りてきた

「今回のバスケの選定方法はルーレットだからな」

「ふざけんな！」

「横暴だ！」

「こつちは確実に滑り込める位置にいたんだぞー。」

難波寮長がそう宣言すると、近くにいた一のFの男共が寮長に殴りかかる

けど…

本当にありがとうございました！難波寮長！

雄二も同じ意見だったようで、一人して見事な90。お辞儀を披露した

「代表、今年はルーレットだつて」

「……残念。力づくなら早いのに」

「おい難波。そろそろ時間だ。出場者を決め始める」

「ういーっす」

これまた突然鉄人が食堂に入つて来て、ルーレット開始を指示する

「…後だな、毎年の事だが多くの観客が入っている。無様な試合は
みせぬなよ」

「　　」

「…と、学園長が言つていた

『じゃあしじょうがねえなあー』

前々から思つてたんだが、何で寮対抗戦の時だけ学園長が最強になるんだろうな?

「セーツてー早速行くぞー記念すべき一人目は……！」

そんな寮長のコールと共に「さう」ともなくハイジャンの飛ぶ前み
たいな拍手が巻き起つる

「　　コイツだつー！」

二年Fクラス

坂本雄二

「…………」

「……アンドマイ、雄一」

「まだ、まだ希望はあるー翔子さあ一緒にならなければ…

「一人田つー」

二年Aクラス

霧島翔子

「…………」〇ヘン

「……ドンマイ、雄一」

流石に哀れすぎるので

「……雄一」、私達の愛の勝利

「誰と誰の間だー！」

「……勿論私と雄一」

「お前との間に愛が芽生えた覚えはなきやあああーーー」

「おこ、また夫婦喧嘩やつてるわ」

「全く、羨ましい……！」

ちなみに雄一と霧島は2寮では既に夫婦扱いである

「次は誰かな？」

「寮長、さては狙つてましたね？」

物凄い悪い笑顔ですよ

二年Cクラス

黒崎一心

『…………誰？』

「誰とか言つたな！」

いや、モブだしお前

「さて、モブは放つて置いて次行くぞ～」

「寮長！？」

しばらく騒いでいたが、どうやら諦めたりして

二年Aクラス

木下優子

「んだよ、また人妻かよ」

「今年はハズレだな～」

「木下はどうせ雑賀以外になびかんしな」

「誰が誰の妻だ！まず優子と籍入れた覚え無いしそもそも付き合つてすらねえしだだの幼なじみだし！後諦めんなよ！頑張ればきっと優子もなびくさ！」

「……雑賀。優子が凄い落ち込んでる」

「今はそれより誤解を解く方が先だ！」

チヨンチヨン

誰かが俺の肩をつつく

「誰だよー今忙し……寮長？」

「いや、熱弁してるとこ悪いんだけどさ……」

?寮長がハツキリものを言わないなんて珍しいな

「何かあつたんですか?」

「いや～それがさ～」

掲示板を指差す寮長

つられてその先に目を向けると…

二年Fクラス

雑賀佳史

死刑宣告が張り付いていた

「お前の名前、引いちつた」

言葉～に、できな～い

視界の端で、さつきとは打つて変わってはしゃいでいる優子が目に
映った

文月学園球技大会

男女混合バスケットボール

第1寮選抜

吉井明久
土屋康太
島田美波
天王寺恵
工藤愛子

控え

小山友香
中林宏美

第2寮選抜

坂本雄二
霧島翔子
黒崎一心
木下優子
雜賀佳史

控え

難波南

玉野美紀

第3寮選抜

木下秀吉

小暮葵

須川亮

オスカーミ・姫島

姫路瑞希

控え

常村勇作

根本恭二

尚、試合は15分ハーフの前後半の総当たり戦とする

交代はハーフタイムのみ。しかし、怪我等はこの限りでない

非紳士的行為は警告とし、退場は7分とする

翔けよ、若人！！b γ西村宗一

「鉄人、アンタ何歳だよ

あつといつ間に脛^{きのづか}が過ぎ、第一試合

「…君達、30メートル以上全力疾走した事ある?..」

「いえ、ないです…」

「いやいませんわ」

「ジーザス!..」

「…正夫が相手なら勝てるな」

「油断すんなよ?秀吉も須川もいるんだからな…正夫はしらんが」

「そこつ!正夫っていうな!」

敏感だな

「佳史、わかつてゐるわね?」

「ああ…ザックリ勝つて「私達のラブラブ^{ラブ}っぷりを観客全員に見せつけるのよ!」うおい!目的違つ!目指してゐる方向が根本的に違つ!」

「大丈夫よー私は佳史以外に初めてを渡す気はないからーーー

「おーい、玉野ー！コイツと代わってくれー！なんか真操の危険を感じるからー！」

マジで

「はいー！お兄様！お兄様のためなら喜んでー！」

「チクシヨウ！コイツも敵じゃねーかー！」

Bクラス戦以来何故かできた俺のファンクラブは全員俺を『お兄様』とか呼ぶ！

「だつたら寮長！」

「君、可愛いね。どこから来たの？」

「寮長おおおおーーー！」

もうこの場に味方はいない……！

「……雄一、頑張る」

「おひ。期待してるだ」

「……違う。雄一も頑張る」

「…そうだな。どうせやるんだ。楽しむとするか！」

「……その意気」

「へんりー・雄一です、青春してやがるしー。

「…何故か放つて置けばその内勝手に勝てやつた気がするのじゃが

「氣のせいだ」

「あのー… そろそろ位置について欲しいんですけど…」

『あ、スイマセン』

今までのは全部入場して、アップ中の会話だったりする

ピーッ！

そうして試合が始まった

「全員マンマークじやー寮長は雄一、須川は姉上、姫路と小暮先輩
は霧島ともう一人を頼むー」

「試合前に話した通りに行くぞー」

試合前に話した内容はこの通り

・雄一は基本的にリバウンドキヤッチ

・霧島と黒崎は適当に動き回ってボールが来たら俺か優子に回す

・俺と優子は好きにやる

つまり…俺と優子の完全速攻！

まずは難なく雄一がジャンプボールを取り、優子に回す

優子はすぐに俺に渡して敵陣に切り込む

「須川！」

「わかつてんー！マーク張つてんぞー！」

「おいおい秀吉、余所見してる暇なんか無いぞ？」

秀吉が優子を気にしている間に俺は秀吉を抜き去り、正夫をかわしてゴールに迫る

「くつ！通すか！」

優子のマークを外した須川が俺を止めにくるが…

「優子！」

「OKー！」

シユツ…パツ

優子のスリーポイントが決まり、速攻で先制

「なんだよあいつら…」

「コンビネーションがハンパじゃねえぞ……」

幼なじみなもので

「ナイシ シュ！」

「じゃあキスし」「断る」…イジワル

そんな掛け合いをしながらハイタッチ！

相手ボールで試合が始まるが、俺と優子が秀吉と須川を徹底マークしているので、向こうはパスを回すばかりで一向に攻められない
だがそんな時、観客席から…

「…マサオ！マサオ！マサオ！マサオ！…」

突然の正夫コール

その声を聞いた正夫は…

「正夫つて…言つなああああああ…！」

切り込んできたかと思つと、いつの間にかシートを決めやがった

…恐るべし正夫コール…！

そしてずっとそんな感じの点の取り合ひが続き、ついに同点で残り
30秒を切った

「集中力を切らすで無いぞ！最悪フリースローまで持ち込むのじゃ！」

秀吉が指示を出す隙をついて、俺が切り込む

即座に、試合に慣れたのか、姫路と先輩が俺を止めに来る

優子は須川と正夫にマークされている

…けど！

俺は先輩の股下からボールを通す

しかし、二人が邪魔で前に出れない

…後5秒！

「…これはフリースローですかね？」

不意に先輩がそんな事を言う

「…いえ、俺達の勝ちですよ

：なあ、雄一？

ブザーが鳴ると同時に雄一のレイアップが決まり、俺達の勝利が決
まった

第九問

『女性は（ ）を迎える』ことで第一次性徵期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

「初潮」

教師のコメント

「正解です」

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント

「随分と急な話ですね」

雑賀佳史の答え

「アレだよ、ホラ…アレ」

教師の「メント

「結局わからなかつたんですか」

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では生理のこと
を月経、初潮のことを初経といつ。初潮年齢は体重と密接な関係が
あり、体重が…（以下略）』

教師の「メント

「詳しく述べです」

「よくやつたなお前らへつ！カツ「良かつたぞー！」

試合が終わつてすぐに食堂に戻ると、寮長が労いの言葉をかけてくる
ちなみに競技と競技の間は選手は基本的に寮ごとの集合場所に集ま
る事になつてゐる

「サッカーは2寮の勝ちでバレーは1寮の、テニスは引き分けでドッジは（奇跡的に）3寮が勝つたからな。このバスケで優勝が決まる…」

凄く入れ込んでいるように話す難波寮長

「俺の見間違いじゃなければアンタ試合をいつのけで観客席で nanopapしてたよな？」

月夜ばかりと思つなよ…！

『坂本モグロ』

『雑賀モグレ』

「何故に…？つーか何でだよ…？」

『るせいつ…女子にキャーキャー言われて羨ましいんだよチクシヨー…！』

『雑賀に関してはさつさと木下と籍入れてしまえ…！…』

『そうだそうだ！人生の墓場に漫かつてしまえ…！』

2寮男子一同魂の叫び

「お前ら本当に欲望に忠実だな…佳史に関しては否定できんし」

「つてオイ雄…？」

まさかのここに来て裏切りか！？
(テメホー・ビツコウつもつだ！)

(…佳史、アレ見ろ)

雄一が指差す先には、『優子の手助けをしないと…』と書かれたテレビで使つようなカンペを持つ霧島がいた

「…………アレを見て、俺が逆らえるとでも?」

「…………すまん」

「…………優子、婚姻届なうこれをあげる

「あら、ありがとう代表。そりね、そろそろ届け出とくべきかしら?
?」

『や～れ! や～れ!
書～け! 書～け!』

「ちよ～うど実印も持つてるし…」

「待て待て待て! とりあえず煽るなバカ共! 霧島は何で婚姻届なんか持つてんの! ? んで優子! 俺は同意してないし、そもそも16だし(誕生まれ)! つーかどうやってウチの実印盗み出したんだ!

! ?」

確か寮の俺の部屋の金庫の中に入れた金庫の中に保管してたはず! .

「あのボケ親あああ……」

「普通におまけまで頂いたんだけど?」

そんな風に取り乱していると、雄一が俺の肩に手を置き

「…ようじや、こちら（結婚で脅迫される側）の世界へ」

腹立つくらい清々しい笑顔でんな事をのたまつてくれました

「嫌あああああ！」

あれ？なんかデジャヴ

そんなバカ騒ぎの間に第一試合が終了

第1寮 第3寮

172 VS 8

この時点で3寮の最下位決定！

「いいな？相手はスポーツ系の第1寮だ。弱点といつ弱点はない

現在、最終ミーティングです

「明久とムツツリーは勿論、天王寺先輩、工藤もスポーツ万能だし、島田の運動神経も悪くない。ハツキリ言って不利だ
だからこそ乱戦に持ち込む！そこで鍵となるのは木下姉と佳史、俺だ。防御は捨てて、攻撃に注ぎ込む！攻撃こそ最大の防御だ！
気に呑むぞ！」

「 」 「 」 「 応—..」 「 」 「

「 第2寮、出陣のダ—..」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

「 …あれ? 寮長俺じゃね?」

この際、寮長の啖きはスルーしようと

「 勝負だ! 佳史に雄一..」

「負けない」

「 それはこっちも同じだ。やるからこそ勝つ..」

そんな事を言ひ合つて試合は始まった

雄一が再びジャンプボールに競り勝つてこっちボールで試合が始まる

マークなんかする時間は『えーーー! まずは速攻で先取点をとる! ..

「 甘いよ佳史..」

てつきり指示が無いので動いていないと思つた明久にスティールされ、カウンターで先取点を取られる

「甘いよ～？ボク達が試合前に何の話し合にもなく本番に出るわけ無いじゃん」

…向こうの頭脳は一藤か。やられたな…

「もうマークする相手は決まってるからね。僕だって迷わないよ」

「…上等…」

そこからは個人技の応酬だった

明久は切り込みからのレイアップを披露し、康太は地味に素早くパスを回す

雄一はダンクを、優子はスリー・ポイントを決め、俺は確実に「ゴールを決める

気付けば試合は後半だった

残り三分

1 審 対 2 審 130 対 126

「慌てんな！確実に決めてくぞ…」

慌てんな、とは言いながら、俺は速攻で敵陣奥に切り込む

慌てた天王寺先輩が優子のマークを外して俺に迫る

「ダメです！先輩戻つて下さい…」

「む？」

勿論その隙を逃すはずなく、優子にボールを回し、スリー・ポイントが決まった

130対129

「そのままバスを回して！持ちすぎは厳禁だよ！」

工藤が指示を飛ばし、その通りに明久達が動く

「あ、姫路がチアの格好で観客席にいる」

「えー？ ビニー？」

…まさか引っかかるとは思わなかつた

「貰いつ！」

「あ、佳史ー卑怯だぞ！」

いや、あんな速攻で嘘だと分かる嘘に引っかかるれどもな

…半分冗談でちょっとでも意識が逸れたらなーって思つただけだったんだが

すぐに優子に回して、ゴールまで走る

…残り15秒…行けるか！？

優子がショートを放つが、天王寺先輩の指の先がかすかにボールに当たつて「コースがずれる

…マズい…これを見たらフリースロー…そうなつたら霧島がいる
こつちは絶対的に不利！

そんな事を考えていたら、無意識にボールに向かって飛んでいた

『雑賀あーー行つちまええええーー』

『お兄様ーーー』

そしてそのままボールを空中で掴み、そのままゴールに叩き込んだ

ビーッ！

『……………』

時が止まつたように静まり返る体育館

「…やつた

『よつしやあーーーつーーー』

『やつやがつたなお前らーーーつーーー』

『2寮最高だあーーーつーーー』

歓喜に湧く2寮の面々

「あーあ、負けたあーーー！」

「…………無念」

「流石 F クラスの知将コンビだね～」

明久、康太、工藤の順に声を掛けられる

「にしても最後のアレはズルいよ……」

「佳史、何をしたんだ?」

「え? いや、観客席で姫路がチアの格好してるので言つただけなんだけど……」

「「「明久(吉井君)が悪いな(ね)」「」」

「まさかの全員敵! ?」

「吉井貴様…そんな煩惱に振り回されるからそんな罠に引っかかるのだ!」

「え! ? 寮長待つて! その竹刀は一体! ?」

「喜べ。今日から一週間お前を心身共に鍛え上げてやる。家に帰れると思つなよ?」

「嫌あああああー!」

うん、デジャヴ

今日から明久は一週間鬼の補習ならぬ鬼の修行(プレゼンテッド
バイ 天王寺)だな

「……」少しでも今年の優勝賞品つて何なんだ？」

「さあ？去年がマッサージチェアだから液晶テレビ（地デジ対応）とかそんなんじゃねえか？」

「お疲れお前ら～」

「雄一」と賞品について話していくと、後ろから寮長が肩を組んできた

「あ、寮長。今年の優勝賞品つて何ですか？」

「あれ？お前ら知りなかつたの？てっきりやつと素直になつたもんだと…」

「素直？何の話だ？」

「今年の優勝賞品…如月グランダパークのプレオープンのペアチケットだぞ？」

一枚だけだがな、と付け加えて去つて行く難波寮長

「「……ええええええええ！」！」？」」「

多分勝つて後悔するのほ「これが最初で最後だろ」

第十問

『（　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

「1549年」

教師のコメント

「正解。特に「コメントはありますません」

坂本雄一の答え

「雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993」

教師のコメント

「ロマンチックな表現をして間違っている間違いです」

雜賀佳史のコメント

「お前本當にビービーもねえな」

（球技大会翌日）

「…まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

雄一がいつものように教壇に上がり、突然礼を言った

「 ゆ、雄一、どうしたのや。ひじくないよ? ……後句でそんなにやつれてるの? 佳史も」

「 ああ、自分でもそう思つ。だがこれは偽りだる俺の気持ちだ。」
後そつちには触れてくれるな。頼むから

「 思い出したくもない…」

あの後優勝賞品のペアチケットは霧島と優子の手に渡り、俺達が互いに押し付けあって、一悶着あつたんだ

… 結局女子側が話し合いで決めるとか言い出したから気が気がしない

ああ、ヤバい

「 とにかく…」ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を教師共に突きつけるんだ!」

雄一の言葉に一同に湧くクラスメイト達

…なんかこうこう一体感も嫌いじゃないな

「 皆ありがとう。そしてAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を着けたいと思つている」

ザワザワザワザワ…

流石にこの話は予想していなかつたのか、ざわめく面々

『どうしてことだ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する…やるのは当然俺と翔子だ」

まあ、クラス間の戦争の一騎打ちだからな。妥当だわ

でもなあ…

「「バカの雄二が勝てるわけなあああー!」」

偶然ハモつた俺と明久にカッターが飛んでくる

俺はなんとか避けたが、明久には少しかすつたようで血がでている

…いくら何でも戦友を殺そとは…

「次は耳だ」

どうやら俺達は他人以上知り合い未満らしい

「まあ、明久の言つとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目は無いかもしねい」

じゃあキレんなよ

「しかしそれはDクラス戦もBクラス戦も同じだったはずだ。まともにやりあえれば俺達に勝ち目は無かつた。今回だって同じだ。俺は

翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない！」

「不思議だな。他の奴がこんな事を言つてもバカにされて終わりだらうが、雄一が言つと本当にやれそうな気がする

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆さん見てやる

『おおおーっ！』

「…だが雄一、どうやって霧島に勝つつもりだ？正直言つてあいつに弱点なんぞねえだろ？」

霧島はAクラスの代表。つまりは学年主席

一年で一番成績がいい奴だ

「大丈夫だ。ちゃんと作戦はある」

ほつまう

「今回の一騎打ちではフィールドを限定する。そしてその教科は…日本史だ」

「日本史？」

「ああ。ただし内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり。召喚獣勝負じゃなく、純粹な点数勝負とする」

満点前提の注意力勝負？何か雄一らしくない作戦だな…

「でも同点だつたらきっと延長戦だよ？そしたらどうブランクのある雄一には厳しくない？」

「それにそもそも面倒臭がりのお前が確実に満点を取れるのか？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくら何でもそこまで運に頼り切ったやり方を作戦と言つものか。後佳史。喧嘩なら買ひつい？」

いや、純粋に心配してんだが…

「つーか霧島なら氣を抜いても小学生レベルなら楽勝だろ？」

「だろうな」

「あつせつ認めるの！」

「何なのお前！？バカなの？死ぬの？」

「よし、お前後で体育館裏来い！…俺がこのやり方を取つた理由は一つ。“ある問題”が出ればアソシは確実に間違えるからだ」

『ある問題？』

「雄一よ、勿体ぶらずに言つてくれんかの？」

ついに秀吉がしびれを切らした

「その問題は…“大化の革新”」

大化の革新で小学生レベルとすると…

「何年に起きたか、とか?」

「お、ビンゴだ島田。その問題が出れば俺達の勝ちだ」

「…明久、大化の革新は?」

「あまり僕をバカにしないでよ。『鳴ぐよウグイス大化の革新』だから794年だよ! ! !」

その時、確かに時が止まった

「明久、大化の革新は645年じゃ」

「バカだバカだとは思つてたが…まさかここまで酷いとは…」

「見ないで! そんな目で僕を見ないで! (泣)」

無理ッス。

「…こんな問題は明久くらいしか間違えない。…だが翔子は間違える。そうなれば俺達の机は…」

『システムデスクだ! ! !』

ま、雄二がちゃんと復習すれば問題ないか

「あの、坂本君」

ん？瑞希が意見なんて珍しいな

「何だ姫路？」

「霧島さんとはその…仲がいいんですか？」

…さて、逃げるか

「ああ、アイツとは幼なじみだ」

「総員狙ええつ！」

「バカだな雄」。Fクラス（「じゅり」）の前でそんな事言えば即処刑に決まつてんだろ

「なつ！？何故明久の号令で一斉に構える！？」

後少しだけ脱出できる…！

「黙れ男の敵！！Aクラスの前にキサマを殺す！！」

「俺が一体何をしたと…？」

ヤバい。ついに明久達から障気的なものが漏れ出した！

「遺言はそれだけか？…待つんだ須川くん。靴下はまだ早い

と…」とん容赦ねえな

「待て！それを言つなら佳史も木下優子の幼なじみだぞ！」

『殺せえええつ……』

「なつー？クソ雄ー！俺まで巻き込むなー！」

「ひめせえー！ひなつたら道連れだ！」

『秀吉と幼なじみと言つだけでも許し難いのに、あまつさえその姉とも幼なじみだとー？』

まず秀吉と幼なじみと言つ時点で気付けよー。

くつー仕方ない！

「戦略的につたつおおおおおおー？」

「……逃がさない」

扉が康太の投げた文房具で悲惨な事に…

「ま、待て康太！話せばわかぬおおおおおつー。」

「……問答無用！お命頂戴！」

……程なく、俺は捕まり、雄一のよつこ磔にされた

カニツ

「これより、異端審問会を開始する」

「離せ須川！話せばわかる！」

「そりだ！暴力では何も解決しない！」

俺と雄一が必死で須川に解放を求めるが…

「とりあえず、被告の罪を」

「「無視か！？」」

「うなります

「はっ！被告、坂本雄一と雑賀佳史（以下、甲と孔とする）は、Aクラスの霧島翔子と木下優子（以下乙と劉）とそれぞれ不純異性交友を…」

「長い。要点だけまとめて報告したまえ

「美人と幼なじみと言つのが羨ましいあります！」

「よろしい！判決！死刑！」

「理不尽な！」

「横暴だ！」

「黙れ異端者！ええい、灯油はまだか！？」

「灯油！？燃やす氣か！？魔女狩りを現代でやるつもりか！？」

「まあまあ、皆の衆。落ち着くのじゅ

ナイスだ秀吉！

「秀吉は雄一と佳史が憎くないの？」

「冷静になつて考えて見るのじや。相手はあるの霧島翔子じやぞ？男である雄一よりも、むしろ興味があるとすれば……」

「… そうだね」

あるえ？秀吉？俺のフォローは？

そして2寮の事情を知つてゐる奴以外の視線が姫路に集中する

「なつ、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

『（君は何もしないよ。してないけど何かされる可能性が大なんだ）』
『（いめん姫路。コイツら本当にバカなんだ）』

2寮と1、3寮の温度差がすげえ

…そこから何だかんだで首脳陣全員でAクラスに宣戦布告しに行く事になつた

（side明久）

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

相手の交渉人は木下優子さん。

ぐつ…秀吉の双子の姉なだけあつてすゞく可愛い…でもこの子を認めるに秀吉にも気があるといつ事に…！

騙されるな吉井明久！秀吉は男秀吉は男秀吉は男…よし…！

「うーん…何が狙いなの？」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

…あれ？佳史が何か苦い顔をしている？

今どこの雄一は何もミスしてないはずだけど…

「だつたら嫌だよ。一騎打ちはお断り」

「何！？」

「当たり前でしょ？そっちに佳史や姫路さんがいるのがわかつてるのでに受けられるわけないよ」

「ぐつ…」

あの雄一が完全に言いくるめられてる…

流石『今孔明』の幼なじみ…！

「……でも、条件次第じゃ受けてもいいよ」

「条件?」

「うん。こっちが勝つたら私に佳史に一つお願いを聞いてもらえる権利をくれて、五対五の3勝先取ならいいよ」

「交渉成立だな」

「だね」「

「ストップ・ザ・前iar」

雄一達がかなり勝手な条件で交渉を終えたけど、速攻で佳史が止めにかかる

まあそりゃううな。だって佳史にとってリスクしかないからね

「何勝手に俺の人生賭け金にしてんだよー!」

「…佳史、諦める。これも運命だ」

「ちよつとい機会だしね。逃がさないわよ」

「悪魔かお前らはーつーか雄一ー何で負ける気満々だー!」

「佳史、泣きながら言わないで…」

「…」

…こつもなり異端者は許さないけど、今回またんな気にならない

だつてなんか佳史が哀れすぎるかい…

「ただ、勝負の内容はこれからで決めさせてもいい。やのへりこのハ
ンテはあってもいいだろ?」

「え? うーん…」

「……受けてもいい」

「うわっ…? びっくりした!」

ムツツコーー並みに気配が無かつたぞ!

「……雄一の提案を受けてもいい」

「あれ? 代表いいの?」

「……その代わり、追加条件」

「追加条件?」

「……うん。負けたら優子のとは別に何でも一つ皿ひととを聞く

「……これは姫路さんの貞操と人生観の危機…? びっくり…? も
しそんな事になつたら…」

ドキドキして夜も眠れないよ!」

「…………つー」 カチヤカチヤ

「つてムツリーーー！まだ撮影の準備は早いよー。
といつか負ける気満々じゃないか！！！」

「…………」「ブンブン

くっ、これも計算のうちだつたら…霧島翔子、恐るべし…！

「じゃ、じつしよう？勝負内容を3つはFクラスが、2つはAクラスが決める。それでいいでしょ？」

「今度こそ交渉成立だな」

ちなみに佳史はさつきの傷をまだ引きずつている

だから反対意見は…

「雄ーー！まだ姫路さんが了承してないのにそんな勝手な！」

僕のこれだけだ。

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

「雄ーー！」

なんか心配なんだよなあ…

side out

第十一問（前書き）

『…ねえ、 には将来の夢つてあるの？』

『なんだよ急に… 考えた事ねえな』

『そりなんだ。 私はあるよ?』

『へえ』

『ちよつとーなによその興味なさうな声は…』

『いや、 実際に興味ねえし… わかった。 わかったから腕を放そう』

『もひ… 私の夢はね？ 一人じゃ叶えられないんだ』

『そんなに人手がいるような夢なのか？』

『つづん。 一人でいいの。 だつて…』

『あのクソババアアアアアアッ！』

『無理 もうお義母様に許可は貰つたから』

『断る』

『　　のお嫁さんになることだもん』

第十一問

『中国後漢の時代に、ショクの劉備に三顧の礼を経て仕えた稀代の名丞相の名前を応えなさい』

姫路瑞希の答え

「諸葛亮孔明」

雜賀佳史の答え

「諸葛亮孔明」

教師の「メント

「正解です。姫路さんはよく名の亮まで知っていましたね」

坂本雄一の答え

「雜賀佳史」

教師の「メント

「それはあだ名です」

その他Fクラスの答え

「 雜賀佳史（今孔明）」

教師のコメント

「だからあだ名ですって」

「では両名共準備は良いですか？」

一騎打ちの立会人は高橋女史。ここ数日の戦争で何回も呼び出したり呼び出されたりしている。

知的な眼鏡とタイトスカートから伸びる美脚が綺麗な担任になつて欲しい先生ランキング二位の美人さんだ

「ああ」

「……問題ない」

ちなみにここはAクラス。まあ、最終戦が腐った畳とか締まらなすぎるし…

「それでは一人目の方、どうぞ」

「将、お願い。」

「一人目は将か…早速キツいな…

「捨てるしかねえな…」

「そりゃいえばお前風祭ヒルームメイトだつたな。何か弱点とかないのか？」

「ねえな。アイツ全教科三百点代中位で、保体と物理は四百中盤だ」

「…捨てるか

だからそう言ひてんじょん

「…将?」

あれ? いないのアイシ…シ…つか! まさか!

俺はAクラスの方ではなくFクラスの中を探す

「姫路さん、いつも通り可愛いね。よつこむAクラスへ」

「え? あ、あの…」

「ああ、俺は風祭将。気軽に将つて呼んでよ。とまあえずメールアドレスを…」

…やはり

将は基本的には一いやつなんだが、寮に入つてから寮長に悪影響受けてるからな…

まあ、それは…

「…将? あなたは何をしているんですかね?」

「ん? 美穂? まあ、待て。とりあえずそここのスレンダーな女性にも声を…痛たたたたた! ?」

「さあ、名指しで指名されてるんですから行きまわよ～」

佐藤が将の耳を引っ張つて引きずる

流石2寮のストッパーだ

「明久、逝つてこい」

「今一入して字が違つたよね！？」

「大丈夫だ。俺は明久（の負け）を信じている

「右に同じだ。気楽に逝つてこい」

「…やれやれ、そこまで言われたら断らないじゃないか

そう言つて明久が前にでる

「それではAクラスは風祭くん、Fクラスは吉井くんでよろしいですか？」

「うー」「はい

「科目は？」

「何でもいいです

：明久、格好付けてるつもりだろうが、無駄だ

お前がバカなのは皆知ってるから

「じゃ、物理で」

「わかりました」

「ふう……やれやれ、とつとうう僕も本『氣』を出す時が来たか……」

はい、三流コント始まります

「ああ、もう隠さなくともいいだろ？」

「見せてやれよ明久。お前の本『氣』を！」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、いつものジヨークだろ？』

『でも雑賀も反応してるし……』

Fクラスからぞわめきがあがる

…あれ？君達味方だよね？

「…吉井、だつたか？お前…」

「あれ、気付いた？」名答。今までの僕は全然本『氣』なんて出しちゃ
あいない

…あの血信はビックりきてんだろ？

「へ？…一歩をか」んな所に伏兵が…！

「 そつさ、君の予想通り。今まで隠してきたけど、実は僕

そこで言葉を切り、二人共召喚を始める

明久は余裕そうに、将は苦い顔をしている

「 左利きなんだ」

Aクラス	風祭将	VS	Fクラス	吉井明久
物理	438点	VS	62点	

「ひでぶつー！」

正に瞬殺

「さて、次に行くぞ雄二」

「ああ。勝負はここからだ」

「ちょっと待つた！さてはキサマら僕を全然信頼してなかつたでしょー!?」

何を今更

「信頼？何ソレ？食えんの？」

「一度も勝つと信じてるとは言つてない！」

「お前らを本気を出した上で殴りたい！…」

「では、二人目の方、どうぞ」

明久を美波が（物理的に）落ち着かせた後、二回戦が始まった

…つーか高橋先生、田の前で起きた暴行ぐらい止めようぜ？

「…………」スクツ

二回戦は康太。ようやく科目選択制が役に立つ

康太は普通科目は明久と同じくらいのバカだが、保険体育は学年トップ。科目を選べる今、これ以上頼りになる奴はない

「じゃ、ボクが行こうかな」

相手は工藤。コイツも確か保体は400オーバーの猛者だったはず

「そろそろ実践派と理論派、どっちが上か決着をつけようよ！」

「…………望むところだ」

なんか二人の間に火花が散つてるような…

「…そうだーもしムツツリーーくんがボクに勝つたら…」

「…………？」

「スペツツの中身、見せてあげるよ」

「…………つー?」ブシャアアアア

鮮血が舞ひ、ってそんな事言つてゐる場合ぢゃない!

「ムツツリー——」「康太あつ……」

「あ、あれ?」

ビツヤラ工藤にも悪氣は無かつたようだが……

「工藤ーお前ムツツリーーを殺す気かー?」

「ち、違つよ!それよつとにかく保健室!」

康太は試合が終わつた明久と工藤が連れて行く事になつた

「しつかりしろ!ムツツリー——」

「ムツツリーーくん!傷は浅いよー?」

「……6万?相場は6文のはず……」

「ムツツリー——」

「死んじゃダメ——————!」

……マジで大丈夫かアイツ?

「……代わり、出す？」

「…ウチの負けでいい。工藤も行つちまつたし」

「わかりました。それでは…」

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太

実践派 VS 理論派

WIN VS OVERKILL

いや、確かに出血多量だよ？でもオーバーキルって…

その前にまだ康太は死んでないからな！？

「それでは三人目の方」

「はつ、はい！」

「それなら僕が相手をしよう」

来たか久保利光。

俺と姫路が脱落した事で学年三位になつた男

「工藤が一番の心配どころだ」

心配どころ？雄一もわかつてないな

「雄一、大丈夫だ。何の心配もない」

「へ、どうしたんだ？」

「… わあ？ 強いて言つなら

「猶言子思子」

「それでは…」

高橋先生が操作を行い、一人の召喚獣が喚び出される

姫路は本当にいい奴だつてことだ

Aクラス	久保利光	3997点	V.S
Fクラス	姫路瑞希	4409点	V.S

決着は、一瞬で着いた

『ホ、マジか！？』

『IJの点数、霧島翔子まではいかないが木下優子に匹敵するぞ……』

Aクラスから次々と驚愕の声があがる

「ぐへ……姫路さん、どうやつてそんなに強くなつたんだ……？」

つい最近まで拮抗していたのにがつかり差をつけられたんだ。そりや気にもなるわな

「…私、このクラスの皆が好きなんです」

「Fクラスが好き?」

「はい だから頑張れるんです」

…嬉しい事言つてくれるな

…こんなバカばっかりのクラスを好きと言つてくれるとは…

…では、四人目の方、どうぞ」

高橋先生にも少し焦りが見え始める。まあ無理もないが

「アタシが行くよ!」

「…俺が行く」

…さて、この妙な因縁と縁にケリを着けよつじやねえか

…なあ?優子

第十一問（前書き）

感想待つてます

第十一問

『次の（　）内に入る同じ語を答えなさい』

（　）や　ああ（　）や　（　）や』

姫路瑞希の答え

「松島」

教師のコメント

「正解です。松尾芭蕉の有名な俳句です」

雑賀佳史の答え

「恨めし」

教師のコメント

「五・七・五の文字数はありますか…どこの幽霊ですか」

須川亮の答え

「抹殺」

須川亮の「メント

「異端者には死を！…」

教師の「メント

「だから君はモテないんだと思います」

「佳史、賭けは覚えてるわね？」

「ああ。Fクラスが勝つたら俺の勝ち、Aクラスが勝つたらお前の勝ち。勝つた方が負けた方に何でも一つ言つことを聞いて貰える、だつたか？」

『何だとつー?』

何故お前らが反応する?

『木下優子に何でも言つことを聞かせられるだとー?』

『何と羨ま...じゃ無くてけしからん!』

『なら俺は秀吉をもうひー!』

「...Fクラスが負けた時は想定しないんだね...」

「だからワシは男じやーと...」

カオスだな

「...バカばっかりね」

「否定は...出来ないな」

「まあ、とにかくアタシが聞きたいのは...佳史が勝つたら何を頼むのかつて事」

何を頼むのか……？

「…………」

「…佳史？」

「……考へてなかつた」

『「つねこつー』』

Fクラス全員ツッ 「//」-

ノリのいいこのクラスが俺は大好きです

「優子はどうなんだ？」

「アタシ?・アタシはもちろん…」

満面の笑みを浮かべる優子

… なんで俺の冷や汗が止まらないんだろくな

「『許婚の確定化』よ 」

『殺せえつー』』

「えー? 何ー?」

「あーもつーいちいち突つかつてくんじゃ ねええつー!」

俺／ＳＥＶＥＲ團。／カシドワーンファイトー。

「ザザ…ザザ…」

『……』

結果は、ラウンド8で全員ＫＯ

「佳史がここまで手こずるなんて珍しいわね」

「マイシラ嫉妬のボルテージと怨念の高さで戦闘力代わるか!…」

「…なるほどじね」

「…そもそも勝負を始めてもらえませんか?」

高橋先生の催促も來たので、勝負を始める

「科目は何にしますか?」

「古典で」「保健体育で」

「…どちらにするんですか」

「お前らもつ一回選択権使つただろ!—譲れ!—」

「それはそれ、これはこれよ!—吉井くんの「何でもいいです」って

選択権放棄でしょー!?

「明久てめえつー!ー!」

「僕つー!ー?」

「…佳史、選択権くらい譲つてやれよ。お前なら教科が何でも一緒に
だろ?」

「ホラ!坂本くんもそつ言つてるじゃない!」

「お前本当になりふり構わねえなー!雄二ー!俺の保健体育は明久以
下だ!」

「…は?」

「あ、バカ!それ言つたら勝てないじゃない!」

「もともとお前に勝たせる気ねえわ!」

許婚とか【冗談】じゃない!

「…もう、総合科目でいいですね」

「「へ?」」

「承認します」

「高橋先生ー?」「あんたそんなキャラでしたっけー?」

まさか高橋先生もボケ属性だったとは…！

Aクラス	木下優子	VS	Fクラス	雑賀佳史
総合科目	4486点	VS	4652点	

『何だあの点数！？』

『アイツ本当にFクラスか！？』

「流石佳史ね…」

「まあ、やる気さえ出ればそれなりにはな

ちなみに保体は一桁だ

決着は、久保と瑞希同様に俺の召喚獣が居合い抜きで即刻着いた

追い込まれていてるのに特に騒がないAクラス。それだけ霧島に信頼を置いているんだろう

…さつき優子もあまり落ち込んで無かつたしな

勝負は大将戦。雄一に委ねられた

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史。内容は小学生レベルで百点満点の上限ありだ！」

ザワツ

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベルつて満点確実じゃないか！』

『注意力と集中力の勝負になるぞ…』

Aクラスもこれは予想していなかつたのか、驚きを隠せていない

『秀吉、なんでアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしてる事になつてるのかなあ？』

『はつはつは、それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測してあ、姉上つ違つ…！その関節はそつちには曲がらなつ…！』

『ああああああああつつつ…！』

『キツ、メキツ、バキバキバキ、メリツ…』

…秀吉、生きてるかな

「わかりました。それでは問題を用意しなければなりませんね。それでは少し待つていて下さい」

高橋先生が教室を出て行く

真面目そうだし、あらゆる資料持つてんだろうな

「ああ、任せた」

「雄一。後は任せたよ」

がつちり握手する明久と雄一

この一人、仲悪いように見えて実は仲良いからな

「……」ビック

大丈夫。忘れないからな康太。

「お前の力には随分助けられた感謝している」

「……」フツ

「坂本くん、あのことを教えてくれてありがとうございました」

「ああ、明久の事か。気にするな。後は頑張れよ」

「はいっ！」

「ねえ佳史、僕って姫路さんに何か悪い事したかな」ボソッ

「何でだ？」ボソッ

今の会話にそんな下りは…

「だつて、姫路さんが僕の事で頑張るつて…暗殺しか無いじゃないか…！」ボソッ

：明久の鈍感は一回死ななきや治らない気がしてきた

「佳史も。お前には策でも戦争でも世話をなつた

「…やる事はわかつてゐるな?」

「勿論だ」

ハイタッチを交わして雄一を送り出す

後は雄一が油断せずに勉強してれば…

『霧島翔子さん、坂本雄一くん、視聴覚室まで来て下れ』

「いよいよですね…」

「そうだな」「いよいよだね」

今はAクラスのモニターで一人の勝負の様子を見ている

「ちなみにそつちの勝算はあるの?」

「雄一が横着せずに勉強していれば勝てる」

「それとあの問題が出ていれば…です」

「うん。もし出ていたら…」

『俺達の…勝ちだ!』

() 年 鎌倉幕府設立

() 年、大化の改新

「…あー！」

「よ、吉井くん！」

「うん！これで僕らの卓袱台が…」

『システムデスクに！』

「……」

「あれ？佳史？どうしたの？」

「まだだ。まだわからねえ

「？」

雄一が満点を取らなければこの勝負には勝てない

「考えすぎだつたらいいんだがな…」

Aクラス 霧島翔子 VS Fクラス 坂本雄一
日本史 97点 VS 53点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった

：同時に、俺と雄一の人生が終わった

第十三回（前書き）

PV10000突破!
ユニーク1500突破!

本当にありがとうございます！

第十二問

『WTOとは何か答えなさい』

姫路瑞希の答え

「世界貿易機関」

教師の「メント

「正解です」

雑賀佳史の答え

「Want To Oneの平穏無事」

雑賀佳史の「メント

「もう一度と戻れないあの日々…」

教師の「メント

「君の身に一体何が起ったんですかー?」

坂本雄一の答え

「雑賀佳史に同じ」

坂本雄一のコメント

「考える事は同じはず…。俺達の、人生は…！」

教師のコメント

「…雑賀くん共々生きる希望を持つて頑張って下さい。相談ならいつでも聞きます」

木下優子と霧島翔子の答え

「W…私は
T…当然
O…夫のモノ」

一人のコメント

「……浮気は許さない」

「私は佳史のモノで佳史は私のモノです！！」

教師のコメント

「雑賀くんと坂本くんの心労の原因はあなた達でしたか」

「ミ…ワシは
ト…とにかく
〇…男なのじや…」

教師の「メント

「…頑張つて下せご」

「「雄二いいいいつ……」「

明久と俺を筆頭として視聴覚室になだれ込む俺達

「三対一でAクラスの勝利です」

わかつてんだよ…言われなくともわかつてんだよそんな事は…

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ

「良い覚悟だ！殺してやる！歯を食いしばれ！」

「今回ばっかりは同感だ！死をもつて償えこのクソ野郎！」

俺と明久がアホ雄二に制裁を下そうとするが…

「吉井くん、落ち着いて下さい…」

「佳史…こんな所で暴れないで…」

俺は優子に抱きつかれて前に進めなくなる

「だいたい53点ってなんだ！0点なら俺みたいに名前の書き忘れ

とかあるだらうナビ……」

「いかにも俺の全力だ」

「「「」の阿呆があーつ……」「

「アキー落ち着きなセイー・アンタだつたらひゅう点も取れないでしょ
うが！」

「それについては否定しない。」

「お前も黙つてひだカスが！…」

「ぐうつー？いつもは割と優しい佳史の罵倒はかなりダメージがつ
……」

明久がさめざめと泣き始め、瑞希と美波が慰めにかかっているが今
はそれどころじゃない！

「……でも、危なかつた。雄一が所詮小学校の問題だと油断してい
なければ負けてた」

「言ひ訳はしねえ

……ブチツ

「……俺さあ、お前に横着しないでちやんと勉強じりつったよなあ
？」

「け、佳史？目が笑つてないぞ！（バシイ）うおつー？お前木刀な

「……（ビビ）から（ビシイ）ぬおつー？」

「……質問してんのはこいつちだ」

「（……魔王降臨、ね）」

「（……優子、どうこう事？）」

「（佳史はキレるとヤクザがビビるくらい威圧感を出すの。普段はかなり気が長いからか、一度キレたら手がつけられないのよ）」

「（普段怒らない人が怒ると恐いの典型的な例なのね……）」

「（確かに佳史くんは怒りませんし……）」

「さア……どうして勉強しなかったのかなア……？」

「す、すみませんでしたっ！自分チョーシ乗つてましたっ！」

土下座で俺に謝る雄一

：：：そーかそーか。雄一の中では人の人生く面倒臭いのを回避か：

「須川。FFF団を使って雄一を逆さ吊りにしろ。康太、今すぐ五寸釘と金鎌、ロウソク持つて來い。今から朝まで『新撰組・桝屋喜右衛門コース』今夜は朝まで（痛みで）寝かせないゾッ～『だ

「それ拷問だよなー？」

拷問？人聞きの悪い

「何言つてんだ雄一？俺がそんな事するわけねえだろ？」

「だよな……佳史が友達にそんな事を…」

「最高に惨たらしく殺してやる……明日の朝日を拝めると悪いなよっ。」

「状況悪化したああつ！？」

「俺がそんな生温い処刑で甘んずるとでも？

「…………雜賀、雄一を殺しちゃダメ！」

「…………チツ」

嫁（霧島）に感謝しろよ

「…………といひで、約束」

「…………一 カチヤカチヤカチヤ！」

「ムツツリーー、僕も手伝つよー」

バカがなんかやつてるが無視するとじょつ

「わかっている。何でも言え」

「…………雄一、私と付き合つて」

そして霧島は姫路に一瞬視線を向けた後

と、言い放った

「『結婚して』『くらこは言つと期待してたんだが…まあ、いいか』

そうして俺はいつも通り教室を立ち去つと

ガシッ

「あら、佳史。どこに行くのかしら?」

できませんでした

「いや、トイレ…」「…」

「やの前に私のお願ひ事“2つ”聞いて貰えないかな?」

…拒否権あんの?

あ、無い? そうですか

「…うて2つ! ? 約束は一つだろー?」

「何言つてんのよ。アタシとアンタの約束で一つ、EクラスとAクラスの契約で一つよ?」

…あ

「雄一…いいい…てめつ…雄一…いいい…」

絶対いつか榎屋喜右衛門コース実行してやるー。

「まあはーつ…戦争前に言つた通り、『許婚の確定（親承認済み）』

よ

…しつこよつだけび指标権は？

…やつぱつ無いって？ですね

「……」

「返事は？？」

「…わーつたよ」

「……………やつぱつには荒療治でアタシの気持ちを伝えるしか…」ボソッ

ん？何か言つたか？

まあもうどうでもいいから

…全世界の普通の付き合ひが出来るカツブルなんて滅んでしまえ

「…うん、二つ目は…ちょっと来て」

やつぱつて手を引かれる

向かう先は…やつや秀吉が消えていったあの扉

：つて待て待て待て！

「優子！何かしたなら謝る！謝るからサプライゼーションだけはあつ！」

「ちょっとー。アンタの中でアタシはどうなつてんのよー。」

久明 Sides

霧島さんが雄一の事を好きだつたなんて……

世界はなんて残酷なんだ！僕達の希望がまた一つ消えたじゃないか！

「……世界は、いつもこんなはずじゃなかつたで満ちている……！」

「ムツツリー」

今ならそのセリフを使っても許される気がするよ……

「嫌だ！まだ死にたくないっ！」

「ちよつとーだから向にもしないつてばー」

ふと佳史の声が聞こえたと思つたら、Aクラス専用の資料室の前で必死に抵抗する佳史とどうにかして引きずり込もうとしている木下さんがいた

ついに佳史が引きずり込まれた

(一) からは諸事情によつて声のみお楽しみ下れこ

「あ……あ……何で抵抗するのよ……」

「俺はここ死ぬわけにはいかない……」

「もへ……仕方ないわね。秀吉……」

「つむづむ……何すんだ秀吉……離せ……」

「ふつふつふ……ワシだけ逝くのは納得いかん……せめて佳史、お主だけでも……」

「くつ……つーか秀吉、お前力そんな強くなかつただろ……？」

「死への恐怖が……限界を乗り越えたのじや……」

「脅迫か!/? 脅迫されてんのか!/?」

「まあ姉上……やるのじゃ……」

「待て……序を訂正しの……の小説はR-15だ……」

「さて、佳史。田を閉じなれこ

「や、やめ……むぐう!/?」

ペチコ……チコ……「ん……」チコバ……

「……ん、はア……」

「…………」

「どう? 佳史? これで私の気持ちが…って佳史! ?」

「…………」 クテツ

「佳史——! —!

その後僕達は、しばらくフリーズしたまんまだつた

PS , 鉄人が担任になって、美波と姫路さんに僕の食費を潰される事が決定しました

……もう、寮に入ろうかな

……いや、でも、ゲームが…

練習問題『僕と食費とスタンガム～佳史の場合～』

（アクラス戦から一時間後）

「映画館に行くわよ！」

「…………は？」

なんともこきなり過ぎてついて行けない

「それよりこいつちはお前のせいで酸欠からの貧血だぞ…どうしてく
れんだコレ。体だるすぎんだけど」

しかも優子が俺にキスなんぢやがつたせいでFFFTに追われる
事が決定したし…何？厄年？

「ホラ、コレ！『恋海』ー前から見たかったのよねー…

「オイ、聞いてる？メッチャしんどいんだって」

「ああ、行くわよー」

「聞けH H H H – ! –

そんな事で俺の話を聞く優子じやなくて…（泣）

「僕の食費がああつ！」「

あの声は明久か?

多分原因は瑞希か美波：いや、両方か

「……………ああ、何でここに？」

俺の隣の優子を見て羨ましそうに俺を見る明日

「木下さんみたいな美人と付き合うどころか許嫁なんて…憎しみで人が殺せたら…！」

一
じやあ代われ

喜んで！！！……て痛たたたた！！

卷之三

「うめんなせ」「うめんなせ」「うめんなせ」「うめんなせ」…

バカめ。後先考えないからそんな目に…

「僕史？代わる」でどういう事かな？かな？」

「待て優子。世界が違う。そして俺の関節はそいつにはまがらない……」
「あああああつーーー！」

「佳史はやつぱり木下さんに？」

「ああ、貧血で弱ってんのを無理やりな

「諦めろ……お前らはまだいい方だ」

「ん？ 雄……？」

「ひょいひどい所……に……？」

振り返ると、霧島と大昔の手錠をかけられた雄一がいた

「『雄一』……おまつ……何やってんのおおおおおー…？」

「男とは……無力だ」

雄一は虚ろな目で宙を見ながら悟ついた表情でそう言つた

「ちよ、雄一？ 何で霧島さんに繫がれてるのさー…？」

「まだ諦めんな！ …俺達にはまだ希望が残つてる（はず）だ…！」

「いや、お前はもう許婚の時点では語んでると思ひ」

「…………男とは……無力だ…」

「佳史までダークサイドに…？ 一人共力ムバツーク…」

男連中がてんやわんやしてゐる間…

「あら? 代表も結局映画にしたの?」

「……うん。ここのなら雄一と一緒にいれるから」

「一途ですね…」

「ウチも素直になれたら…」

ガールズトークが盛り上がつていたそつな…

「……佳史(雄一)、何が見たい?」

「「早く自由になりたい」「

「……じゃあ、コレ。『地獄の黙示録・完全版』」

「オイ待て。それ三時間三十二分もあるぞ!」

「……一回見る」

「一日の授業よつぱいじゃねえか!」

「……授業中、雄一に会えない分のう・め・あ・わ・せ」

「冗談じゃねえ、俺は帰るぞ」

「……今日は、帰らない」

バリバリバリバリ

氣絶させられた雄二が連行された

「うん。いつも通りだ。」

「仲の良いカツプルですね～…」

「ホントね～…」

「羨ましいわね…」

三人とも、何かが間違ってる。

「優子、頼むから見習わないでくれ

その後、普通に『恋海』を見たのだが…

「…………」「…………」

「佳史…何で私を…遠ざけるのかしら…？」ボソリ

「遠ざけてんじゃねえ。むしろ何で俺の肩に頭を乗せよ？とあるへボソリ

「…………」「…………」

優子との静かな攻防に気を取られて内容が頭に入らなかつた…

第十四問

『あなたが今一番欲しい物を教えて下さい』

姫路瑞希の答え

「クラスメートとの思い出」

教師の「メント

「なるほど。お姫さんの思い出になるような、そういう出しども
いいかもしませんね」

土屋康太の答え

「Hな本（　　）成人向けの『写真集』

教師の「メント

「取り消し線の意味があるのでどうか」

坂本雄一の答え

「俺の平穏無事」

教師の「メント

「何があつたのですか？筆圧が物凄いのですが」

雑賀佳史の答え

「血由田（）許嬪と暮りゆ家」

教師のコメント

「何故始めの答えに血痕がつこつこるのでしうつかへ」

木下秀吉のコメント

「やう…諦めるの…や…」

「佳史」

「ん？」

「如月ハイラングって知ってるわよね？」

「今建設中の無駄に『デカい遊園地かなんかだったか？確かもうすぐ
プレオープンだつたな」

「そ、それよ。だからオープンしたら一緒に……」

「霧島と工藤とでも行つてこいや

…待て。無言の笑顔で関節を取ろうとするな

「だーかーら！一緒に行こうつて言つてるのよーーー！」

「やだ。だるい。面倒臭い…ってきゃあああーーー！」

「なんでなのよー理由を説明しなさい理由をーーー！」

「人いっぱいの中にわざわざ疲れに行きたくない

「…ふーん。なら、人がいっぱいじゃなかつたら行ってくれる？..」

「んな事無いこと思つが…それなら別に」

「（）（）（） 約束よ？もし破つたら…」

「破つたら？」

「……（）（）」

「え？何その笑顔？すっげえ恐いんだけど」

新学期が始まり、徐々に試合戦争の騒ぎも収まってきた

今は文月学園の学園祭、『清涼祭』の準備に学年を問わず全生徒が追われている

……はずなのだが

「勝負だ！須川くん」

「お前の球なんか場外まで飛ばしてやる」

準備をサボつて野球をしていた

：俺？屋上で昼寝してる

オイ、誰だ今お前もサボつてんじゃねえかとかほざいた奴は

「貴様ら、学園祭の準備をサボつて何をしているか！」

「ヤバい！鉄人だ！」

あ、見つかった

まあ俺には全く関係ないけど

「吉井！貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違います…どうしていつも僕を目の仇にするんですか！？
そ、そうだ！佳史！佳史がどこかでサボつてます！」

明久の奴…俺を売りやがったな

：後でコロス

「ああ、奴か。問題ない。既に手は打っている…それよりまずは貴

様だ吉井…」

「くつそおおおお…」

バカめ。人を売ひつとした報いだ

…ん?『手は打つてこる』…ってヤベー!

俺は急いで屋上の扉に手をかけて思いつきり開く!

「うそにひは。雑賀くん」

「アアハイ、ノンーチハ」

そこには、凄い笑顔で威圧感を放つている高橋女史がいらっしゃった

「準備をサボつてお昼寝とは、いい度胸ですね… まあ行きますよ」

「う、ちくしょおおおお…」

そのまま俺は高橋女史の召喚獣によつて教室に連行された…

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが…とりあえず、実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

雄一の野郎心の底からせぬ氣ねえな

…まあ、俺も似たようなもんだけ

さて、ラノベでも読んどくか

「じゃあ実行委員は島田でいいか?」

俺がだらけでいる間に島田が推薦されたらしい

「うーん…補佐次第で受けてもいいナビ…」

『吉井でいいんじゃないかな?』

『雑賀でも上手ことできそうだがな』

…寝とけばいいかな?

キーンコーンカーンコーン

「あー、さしあつたー。」

やつくりと伸びをして鞄を持って立ち上がる

れい、将と雄一こども声かけどうか遊びに行くかな

「オイ雄」……雄二。一緒に帰る」「なつ！？まだチャイム鳴つて一分も経つてねえぞー？」

「…？」
は無理だな。

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

「戦略的撤退！！」

「絶対逃がさない！！！」

俺と優子の逃走中（賞品は放課後の自由）：スタート

「おお、達也。奇遇だなー

「やつぱつお前も普通の手段じゃ逃げられねえか」

俺と雄一が潜んでるのは女子更衣室

下手に女子禁制の場所に隠れても優子なら躊躇なく踏み込んできそ
うござば

P P P P

「ん？ 明久か？」

俺も雄一の携帯に耳を近づけて話を聞く

「 もしもし」

『……雄一、今ど』

「 人違いです」

霧島の声が聞こえた瞬間通話を切る

「お前そろそろ反応が反射レベルになつてきてるよな」

「ほっとけ」

PPP

つと俺にもか

秀吉なら心配ないな

「どうした？何かあつたか？」

『佳史。大人しくFクラスに戻つて来なさい』

「I'm American

プツッ

ふう…危ない危ない

「…流石に俺も国籍を「」まかすのは思いつかなかつたぞ」

「「ひぬせー」

「…なんか無性に虚しくなつた

「「…………」「」

良かつた。雄一も虚しさを感じたようだ

…言い合ひしなけりやよかつた

ガチャリ

「やあ、雄一に佳史。奇遇だね」

「「「え?ううう理由があれば女子更衣室で居合わせるのか教えるバカ」

「

理由も無く女子更衣室に入つて来るとか変態じやねえか

ガチャ

「あら? 雑賀くんに坂本くんに吉井くん?」

「よお佐藤

「将のストップバーか

「奇遇だね」

入つて来たのは佐藤

つまりは女子

んでここは女子更衣室

「せ、先生！覗きです！変態です！」

「逃げるぞ二人共！」

「「了解！！」

「何！？また吉井と坂本と雑賀か！？」

俺まで問題児のカテゴリーに入れんな鉄人！

結局その後鉄人からは逃げ切ったが、明久の策略で清涼祭に強制参加することになった

不幸だ…

アホバラジオ！第一回（前書き）

なんか急にやつてみたくなつた

アホパラジオ！第一回

「文月学園第一寮！」

『アホパラジオ～～！』

『待てと言われて待つバカはいない！』

佳「ども～、ニ F 所属の雑賀佳史です」

『よつこぞ A クラスへ』

将「ハローーーー A 所属の風祭将でっす！」

佳「アホパラジオ第一回目の放送が始まりました～」

ワアアアア

将「イエーイ！」

将「…ってビデオしたよ佳史ーもつとトランショーン上げてこりひせー…」

佳「…いや、な？さつきある情報が入ってきてよ…」

将「情報？」

佳「このラジオにゲストが来た場合、秀吉と優子以外は声優さんで
リストでいくらじい」

将「いい事じゃないか！むしろ女性陣 Welcome！」

佳「バカ野郎！お前…声優さんティイストってことはアレだぞ？下手しなくても、ダチャーン<e>の瑞希が来るって事だぞ！？」

将「（。 。 . ）」

佳「そんなもんが来てみろーどつあがいても…」

『俺らしさ』がねえだろ？が…』アドン

将「…お母さん<e>の吉井を呼ぶしかないな」

佳「美波でも大丈夫だぞ？白瑞希になるから」

将「まあ、それはそれとして…」のラジオさ？第一回田なんだよね

佳「そうだ。何か不具合でもあったか？」

将「いやセ…つまりはセ…お便りも質問も全く無いんだよね」

佳「マジですか

将「マジだ。…という訳で、作者が今の内に質問貯めておこうとしているわけよ。…受験中なのに」

佳「勉強しろ作者。…という訳で、疑問質問ふつおた向でも構いません。何かあれば感想に書き込んでください」

将「作者受験のため、しばらくは更新がめちゃくちゃ不定期になりますが、応援していただければ幸いです！」

佳「それではまた次回！」

『
またね
』

将「お前本当に終始ローテンションだな」
佳「うるせ。性分だから仕方ないだろうが

第十五問

『「パンがないなら、お菓子を食べればいいじゃない」といつに葉で有名な人物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『マリー・アントワネット』

教師のコメント

『正解です。傲慢な人物としても有名ですが、悪女としても有名ですね』

坂本雄一の答え

『手作りじゃ無ければそれでいい』

教師のコメント

『人物を答えて下さい』

雑賀佳史の答え

『食つた後に何もないならそれでいいや』

教師の「メント

「本当に君と坂本君は何があつたのですか？」

2 寮寮監（鉄人）の「メント

「諦めずに自由を信じて頑張れ」

風祭将の答え

『じゃあ俺は君を食

教師の「メント

『書かせねーよ。』

「で？俺に何を協力してほしいって？」

「僕は風祭くんと出るから、雄一と一緒に召喚大会に出てほしい」

「ヤダ、ダルイ、メンドイ」

「何故にカタマト！？」

何で俺がそんな面倒な事を理由もなしにやらなきゃいけないんだ

「そもそもお前と雄一で出ればいいだろ？」

「いや～…それがね…」

（理由説明中）

「…って訳なんだ」

「噛み碎くと、優勝と準優勝の賞品に人用の腕輪を作つたはいいけど、両方不良品だったと？」

「うん」

「…ペアの理由はわかつた。でもそれだけか？」

「や、そそそれだけって！？」

わかりやすすっ！なんか隠してんのまるわかりだな

「…姫路関連か？」

「…？」

「嘘つけねえなお前」

まあそれが明久バガが明久バガたる所以の一つでもあるからな

「仕方ない。協力してやるよ」

「本当に…？」

「嘘ついてどうあるよ。…まあ、その前に」

明久が唾を飲む

何警戒してんだ？

「Fクラスの出し物って結局何になつたんだ？」

「やっぱり寝てたんだ…」

「普段はただのバカだけど、坂本の統率力は凄いわね」

「そうだね。普段はただのバカなのにね」

「…言つておくがそう大差ねえからな。お前ら

「「何…だと…」」

あれだけまとまりが無かつたFクラスが雄一のおかげで一致団結元々体力だけはアホみたいにある連中ばかりなので、作業はあつ

「こう間に進んでいく

「それにしても、よくあのオンボロ教室を此処まで綺麗にできたね」

「あ、それはですね、木下くんと佳史くんがどこからかテーブルクロスとかカーテンとかを持って来て、こう手際よくテキパキと」

そう言って俺と秀吉を尊敬の眼で見る瑞希

なんか照れくさいな、こうの

「まあ、見かけだけはそれなりになつたんだがな」

「クロスを捲ると」の通り、じや

クロスの下からは、少し痛んだ机と、普通の机が出て来る

「Eクラスとロクラスの人達には感謝しなくちゃね」

「若干苦労はしたがな」

Dクラスは清水を交渉のテーブルに出して美波をダシにしたらすぐ力がついたんだが… Eクラスには少し条件付けられた

「（）まで装飾が完璧なら後は出し物ね… 「……飲茶も完璧」 きやつーーー」

「常日頃から気配消して行動すんなよ康太…」

「……つい、癖で」

どんな癖だよ

「ムツツリーー、厨房の方もオーケー？」

「……味見用」

俺達の前に胡麻団子とお茶を差し出す康太

自分で食つて確かめることだらう

「わあ……美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃつていーの？」

「……（「クニ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

女子+秀吉が胡麻団子を勢いよく頬張る

「お、美味しいです！」

「本当ー表面はカリカリで中はモチモチで食感もいーしー。」

「まあなことじのも良このや」

“ひつやら胡麻団子は女子がトロップするほどの大成功らしい

…こしてもひつじて見ると本当に女にしか見えねーな、秀吉。

「じゃ、俺らも貰つか

「さうだね。ムツツリー、いただきます」

「……（「ク「ク）」

皿に乗った胡麻団子を一つ掴み、女子達と同じように勢いよく頬張る

……ふむ

「表面はゴリゴリ、中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいと妙な刺激が何とも グゲパツ」

「表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても ンゴパツ」

同じような感想を言って俺と明久がぶつ倒れる

ああ、意識が…

↓ side 明久

常日頃から命の危険を体験してるせいか、僕は軽く走馬灯を見ただけで済んだんだけど…

「ムツツリー…佳史の容態は…？」

「……脈拍低下、瞳孔拡大を確認。かなり危険な状態」

「くそつー念のためムツツリーはAEDを準備して！」

「……了解！！」

耐性が低い佳史じゃ耐えられなかつたらしい。」の前のお弁当騒ぎの時も僕達の中で一人だけ気絶してたし

「……なつ！？何でアンタがこんな所に！？……何？六千万？んなもん持つてる訳ねえだろ。……は？だつたらチューでいい？ふざけんな。アンタは懲りずに弟襲つてる！」

……何だろ？。凄い僕にとって不穏なやり取りがされてたような…

とりあえず今は人命救助が優先だ！

{} side out {}

「……ふつ、地獄を見たぜ……」

何の比喩でもなく、リアル！」。

「佳史、生きてて良かった……！」

「……心配させるな」

「ありがと？。本当にありがと？」

三人で生きる喜びを噛みしめる

ちなみに女子達はまだトリップしてゐ

「うーつす。戻ってきたぞー…ん?なんだ、美味そ'うじやないか。
どれどじれ?」

「「「「あ」「」」

雄一が突然戻つて来て止める間もなく、皿の上の対人決戦用宝具を
口にする

「…たいした男じや」
「雄一。キミは今最高に輝いてるよ」
「A級戦犯の汚名返上だな」

「…お前らが何を言ひていいのかわからんが…ふむふむ、外はゴリ
ゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつ
ても んゴパッ」

アーメン(・。・・)

「あー、雄一。とつても美味しかったよね?」

この状態でその質問をされるお前は筋金入りの鬼畜だと思つ

「……雄一?」

「あれ?雄一?ゆーうーじー」

返事が無いのを怪しんで、雄一に近寄り顔に手をかざす

「……

「佳史？雄一は、「息、してない」救急車あ――――――!」

その後、偶々近くに置いていたAEDで雄一は一命を取り留めた

…何でAEDがFクラスにあつたんだろうな?

第十六問

「物を押したりした時に働く、押した力に対してもう一つの力は何か、例を交えて答えなさい」

姫路瑞希の答え

「反作用…台車に乗りながら壁を押すと、自分が壁と垂直に逆に動いた」

教師のコメント

「正解です。例もわかりやすいですね」

木下優子の答え

「反作用…押しても彼氏がなびかないで引いてみる」

木下優子のコメント

「結局効果はありませんでした…」

高橋洋子のコメント

「例が『押して駄目なら引いてみる』になつてるので間違いですが…ですが、個人的には応援しています。頑張って下さい」

霧島翔子の答え

「押してダメならスタンガン」

霧島翔子のコメント

「……一つ一つあふりーだむ」

高橋洋子のコメント

「坂本君の御冥福をお祈りします。
…いや、ホントにすみませんでした。」

「えー、それでは試験召喚大会一回戦を始めます」

あの後教室で雄一がどこに行っていたやら、明久の同性愛者疑惑とかがあったがまあ、それはどうでもいいや

とにかく召喚大会一回戦が始まった

「三回戦までは一般公開もあつませんので、リラックスタして全力を出してください」

「へへへ」「わかつてこますよ」

むしろこんな所でアガつてビリするよ

「頑張りうね、律子」「うん」

……にしても相手は女子か……といつかどいかで見たような…

「では召喚してください」

「「試験召喚……」」

Bクラス　岩下律子＆菊入真由美

数学　　179点　& 163点

「Bクラスにしてはなかなかつて所か」

「そんなもんだな」

「「むー。」

如何にもFクラスのクセに！みたいな目線で睨みつけてくるが…今回は相手が悪かつたな

「「試験召喚ー！」

Fクラス 坂本雄一 & Fクラス 雜賀佳史

数学 179点 & 347点

「何あの点数！？」

「Fクラスなのにー？」

俺は振り分け試験は点数“だけ”はAクラスだったんだよーー！

…言つだけ悲しいから言わないが

「あれ？雄一お前』勉強が全てじゃないって事を証明したい『って言つてなかつたか？なんで勉強を？」

「前に、翔子に聞かれたんだ

「何で？」

「………… 手はどこで挙げたいか、と」

ああ…色々すつ 飛ばしたなあ…

「俺はもつ負けられない一次で勝たないと、俺の人生は…」

「…ドンマイ」

掛ける言葉もないわ

「そろそろ開始して貰えますか?」

「血も涙もねえなオイ」

そつ言づだけ言つて木内先生は開始の合図を出す

「オイ雄一、来るぞ」

「婿入りはいやだ…霧島雄一なんて御免だ…」

駄目だコイツ、早くなんとか（物理的に）しない」と

「はあ… 一人でやるしかないな…」

俺の召喚獣が装備の日本刀を構える

「律子!」 「真由美!」

「 「行くわよ!」 「

「そりが、逝つてこい」

「「……え?」」

Fクラス 雜賀佳史 VS Bクラス 岩下律子

数学 347点 VS 0点

一瞬で間合いを詰め、抜刀術で岩下の召喚獣の首をはねる

……グロい

そしてそれで唖然としている隙に菊入の召喚獣も倒して、試合は終わった

「婿入りは嫌だ婿入りは嫌だ婿入りは嫌だ」（ブツブツ…）

「悪いが俺はコレをシバいて戻して地獄を見せなきゃいけないから帰らせて貰うぞ?」

そのまま唖然としている一人を放つておいて、さつと会場を後にした

さて、Aクラスに行くか…優子を見つからないように

「お帰りなさいませ、お嬢様」

『キヤー———.』

「お席に案内致します。——へいりんぐ

「あの……雜賀先輩ですよ……? 要かったらアドレス教えてもらえませんか……?」

「申しぐません、携帯はロッカーレに置いておりますので、今手元には無いのです」

……とつあえず、じひこいつなつた……?

第十七問

『バルト二国と呼ばれる国々を全て挙げなさい』

雑賀佳史の答え

「コトニア、ヒストニア、ラトビア」

教師のコメント

「その通りです」

木下優子の答え

「吉井明久×坂本雄一×木下秀吉」

教師のコメント

「気を確かに持つて下さい」

霧島翔子の答え

「ショットランド、スコットランド、ウェールズ

霧島翔子の「コメント」

「……私と雄一の子供の名前候補」

教師のコメント

「もう問題関係無いじゃないですか…」

吉井明久の答え

「香川、徳島、愛媛、高知」

教師のコメント

「どう見ても間違いなのに何故か丸を付けたりました」

「ありがとうございました」（棒読み）

清涼祭もかなり長い間開放されるので、当然何度も休みが入る

今の姫でようやく一度田の休み時間を迎えた

「お疲れさん、佳史。お前も大変だな…」

手に飲み物を持つて将がこっちに寄つて来る。当然将も執事服だ

「やう思ひなつさうと帰らんせう」

「俺には無理だ…」

「即答かい」

「いや、だつて…」

将が俺の後ろを指差すので、そつちを向くと…

「離して…アタシには佳史（執事ｖｅｒ．）をお持ち帰りするつてこゝ最優先任務があるのよ…」

「それもつただの願望です！落ち着いて下さこ…」

「願望じやないわ！自然の摂理よ…」

「もはや規模が尋常じや無くなつてる…？」

「旦那の成長は妻が確認する義務があるのよーそれについてはアタシがルールよ…？」

「展開早っ！？どうやってそんな考えにたどり着いたんです！？ソレ以前にまず貴女と雑賀君はまだ夫婦じゃありません！」

まだは余計だバカ

「大丈夫！一年後には雑賀優子か木下佳史になつてるから！」

「御免被る」

「ちょ、誰か助けてえ～～！…」

どうやら俺の一言が余計だつたらしく、優子の力がさらに強くなつたようだ

「おい将、いいのか？相方がピンチだぞ？」

「済まん美穂…俺は…無力だ…！」

それでいいのか幼なじみ

「まあいいじゃねえか。お前嫌がつてた割にはきつちり仕事こなしてたし」

「……」

否定できねえ…

「仕方ねえだろ。気持ちとは裏腹に体が勝手に動くんだから

「もはや接客のプロだな」

昔ホストのバイト（年齢詐称して）やつて稼いだからなあ……作り笑いが自然とできる

「それを言つなら将だつてノリノリだつただろ？」「

「俺の場合クラスの仕事だしなあ」

「やうか、じゃあ俺はそろそろ着替えて帰る……『それはダメ』『』

帰る、と言おうとする、優子を筆頭に△クラスの女子（霧島、愛子、佐藤を除く）がドアの前に立ちはだかる

「……なんですか」

「……雑賀、もつ少しいてあげて」

「とは言つても俺達の場合、クラスの設備がかかつてゐるからな……」

どうやら俺が寝てた間に稼いだ金で設備を交換すると話が出でたらしく、先日雄一がババア（学園長）にそれを認めさせたりして

傷んだいじめは流石に寝づらいで、案外やる気だつたりする

「……今の優子達のテンションだと、雑賀が帰つたら多分仕事にならない」

「佳史くん、私から見てもカツコイイし執事服似合つてるしね～。またファンが増えるんじやない？」

「止めてくれ」

これ以上兄とか呼ばれたくない……妹なんか一人で十分だ

「兎に角、仕事云々の前にそろそろ二回戦なんだよ」

「……なら、仕方ない。優子、どいてあげて」

「仕方ないわね……」

その後雄一と合流し、難なく三回戦を突破した

「…………ヤベヒな

「ああ、本当にまずいな。どれくらいヤバいかっていうとマジヤバ
い」

「落ち着け」

「落ち着いてられるか！これに負けたら、俺は……俺はアアア……！」

準々決勝

坂本雄一＆雑賀佳史

VS

霧島翔子＆木下優子

第十八問（前書き）

キャラ設定改新します

読み直したら訳わからなかつたんで：

第十八問

昔、母さんが言っていた

『佳史、良いことでも悪いことでもいい。自分のしたい事で一番になりなさい』

……正直、これは絶対に必要ないと思つが……これでいいのか？

… もう、勘弁してくれ

以上、『モテる男校内第一位』（78%）、『兄にしたい男子第一位』（98%）、『罵られたい男子第一位』（68%）、『料理上手（和食部門）第一位』（100%）の四冠を達成した2年F、雑賀佳史くんのコメントでした

「…なんでこんなに客がいないんだ？」

召喚大会の帰りに雄一と次をどうするのか話し合っていたが、教室に着くと、予想外の光景に絶句した

「すつからかんだな」

「お、戻ってきたよ! じゅの」

「ああ、それより秀吉、これはどうこうつ事だ? また常夏コンビの仕業か?」

「常夏コンビ?」

「ああ、佳史は知らなかつたな、あのな……」

（雄一説明中）

「…なるほど」

次来たらシメる

「しかしのう、アレ以来妙な客は来ておりんぞ」

「だとすると…」

雄二がこいつを見た

「考えられるのは二つ。その常夏コンビが悪評を流しているか… 噺自体が独り歩きしているかだ」

「尊が独り歩きじゃと…？」

「落ち着け秀吉。確かにそれなら取り返しはつかない…しかしそれなら間違いなく鉄人なり高橋女史なりが確認しに来る。しかし今までそれがない。つまりは常夏コンビの逆恨みだ」

そんな考えをしていた時…

「ただいま～」

「邪魔するぜ」

「明久か」

明久とついでに将が帰つて來た

「将もついてきたのか？」

「ああ。姫路さんと島田さんと木下弟のウエイトレス姿…見ないわけにはいかないだろ……」

将はどこまでも行つても変態だつた

「…ムツツリーー!とは真逆だね」

「…ある意味男らしいな」

「……そんな事実はない」

今更だな康太

「それより佳史、お密さんだよ」

「あ?…………唯?」

「…お兄ちゃん」

「葉月もこるですっ」

「なんだ、チビもこいたのか」

「チビじゃないです!葉月ですっ!」

「悪い悪い、よく来たな葉月」

「はいですっ!赤いお兄ちゃん!」

田か？田の上とか「ルア

無意識に人の急所（ココロノツバメ）を抉る葉月はある意味最強だと思います

「で、唯。お前優香さんは？まさか一人で来たとかはないな？」

清涼祭は原作と違つて金土日（日曜日）の3日間で、大会は金日（日曜日は決勝のみ）の2日間で行われる…事にしどいて下さ

「…優ねえの所」

「…ああ…」

頑張れ優子

「た、助かったのじゃ…」

『あれ？ 雜賀、妹か？』

『可愛いなあ。後10年くらいしたらお兄さんと付き合わないか？』

『むしろ俺は今だからこそ付き合いたいがなあ』

『お前、直に直れ。この世の地獄をみせてやる』

『すいませんでしたっ！自分ふざけてましたー』

次はねえぞ

「「ただいま～」」

「あ、おかえり姫路さん」」みな三「瑞希ー。」「美波ちゃんー。」

「殺るわよー。」

「いふあつー?」

……美波と瑞希が帰つて来た瞬間に偶々葉月が明久に抱きついていたため、明久がお星様となつた

「姫路に島田か。じつやう勝つたようだな」

この状況で落ち着いてるお前は大概大物だと俺は思つ

「瑞希、そのまま首を後ろに捻つて。ウチは膝を逆方向に曲げるから

「い、いつですか?」

「……秀吉」

「ひむ。明久の命は後5センチじゃ」

秀吉と一緒に明久に合掌しながら、そんな会話をしていた

「それで、この姫の少なめさはどういふ事なの？」

教室を見回して言ひ美波

「やうやく来れば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「葉月、教えてくれないか？」

葉月と屈んで目線を合わせる

「雄一が田を細めていたが子供好き（良い意味で）なのか？」

「えつとね…中華喫茶は汚いから行かない方がいいって」

噂は消しきれなかつたのか…？

「ふむ…例の連中の妨害が続いているんだもん。探し出してシバき倒すか」

「例の連中つて常夏コンビ？まさかそこまで暇じゃないでしょ？」

「いや明久、むしろそいつ等以外にそんな暇な事するバカはないだろ？」

「あ、それもそうだね」

「兎に角、噂の広がり具合は確かめないとな…葉月、それはどうで聞いたんだ？」

「秀吉、すまないが昼休憩に入つていいか? 明久と佳史も」

「構わぬ。ならば姫路と島田と島田妹も一緒に行くところや」

「いいの木下? じゃあ葉月、お姉ちゃんと一緒に行こうや。」

「はいですフー。」

「いいんですか? ありがとうございます。木下君」

「で? ビジだ葉月」

「えつとですね… 短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いる
お店」

「何だつて! ? 佳史、雄一、それはすぐに向かわないと! 」

「そりだな明久! 我がFクラスの成功のために(低いアングルから)
綿密に調査しないとな! 」

バカのテンションが遂に振り切った

「落ち着けバカ共。多分それ口クなことが「さあ! 行くぞ! 」「O

K雄一! ……「あ~……」

もつ一回捕まつてしまえお前ひ

第十九問

雑賀夫妻のマル秘！恋愛テクニック講座！

「…………おい優子。これは何だ。十文字以内で説明しろ」

「題名の通りよ」

「おいおい、このタイトルでつち上げもいいところじゃねえか」

「『』は、私優子と夫佳史で、私達の恋愛の秘訣を教えたり、相談に乗ったりする『一ナード』です」

「誰が夫だ」

「さて、早速ハガキの紹介です」

「聞けエエエ……」

「『突然ですが、仲良し夫妻の一人に質問です』」

「オイ差出人。俺はいま寝てる所を拉致られて、手足の関節を外されてベッドに寝かされて、このアホに馬乗りにされている。コイツを真似して犯罪にはしる前にもう一度考え方」

「『私には夫がいるのですが、すぐに他の女性と会話をしたりして、浮気をします。どうしたらいいでしょうか』」

「会話位許してやれ。むしろそれだけで浮氣とは言わん」

「やつよな。浮氣は許せるものじゃないわ。だから浮氣出来ない状況を作つてあげないと」

「浮氣も何もまず付き合つてすらないし許婚とか口約束だから無効だしそもそも俺とお前はまずただの幼なじみだと云つ事を自覺しろ。そしてそれは彼氏が出来てから寒行しろ」

「まづは夫に浮氣のリスクを教えてあげることね」

「…優子…さつきから俺の直感が逃げろと叫んでるんだが、気のせいだと思つていいいんだよな?」

「……用意する物は三つよ」

「待て。今の間の真意を教えろ」

「まづは…『石畳』」

「ダウトだ優子。それ拷問用具だから。浮氣云々の前に処刑だから」

「一いつ皿は…『ひたすら皿分（嫁）が愛を囁き続ける』」

「洗脳か!? 洗脳する気か!? 止めろその手に持つてこないでプレイヤーを捨てる!—」

「三つ皿は…」

「いの状況でよく冷静に事を進められるな!?」

「…『姫路さんの料理』」

「無理！文月学園の生徒かつ瑞希と親しい奴以外にその方法は無理だ！そして手に入れた所で男の方が処刑される絵しか見えねえ！」

「君の三つで夫に浮気の慰めしを教えてあげなさい」

「俺は今、その三つを持つてるお前が何より恐い」

「以上、『もうすぐ坂本（一七）』からのお便りでした」

「明らか知ってる奴じゃねえか！？雄一、今すぐ海外逃亡しろーでないと死ぬぞ…！」

「…優子、いい加減に手に持っている物を捨てろ」

「…何で島田さんと姫路さんを名前で呼んでるのか説明してもらいましょうか？」

「まあ待て話せばわかる。だから関節をあらぬ方向に曲げるのやめつ…！」

「よし、戻る」

「そうだな。明久。Aクラスだけは止めよ!」

「「！」まで来て何を言つているのぞー早く中に入るよー」

「「！」の人でなし！ー」

葉月の案内でたどり着いたのはAクラスの メイド喫茶・ご主人様とお呼び! と言う名の魔窟だった

「そつか、ここって坂本と佳史の大好きな霧島さんと木下さんのいるクラスだもんね」

「…お兄ちゃん。優ねえから逃げちゃダメ」

「二人共、女の子から逃げ回るなんてダメですよ?」

くつー抵抗しているうちに女子組が追いついたようだ。余計逃げにくくなつたじやねえか!!

「雄一、佳史。これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから…」

「あそこ」に趣味で来てるバカがいるんだが?」

「…………！」パシャパシャパシャパシャ

唯の目を抑えながら明久に言い放つ。

…唯にこんな汚れきったバカを見せる訳にはいかない

「……ムツツリーーー？」

「…………人違い」

無理があるだろ

「どこのからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの?」

「…………敵情視察」

「へえ…その割には目線が低いがな」

「…………」ブンブンブン

「ムツツリーーー、ダメじゃないか。盗撮とか、撮られている女の子が可哀想だと」「一枚百円」一ダース貰おう 可哀想だと思わないのかい?」

「アキ、普通に注文してるわよ」

「千円札を取り出しながら『セリフじゃないな』

まあ、バカはほつといて…

「佳史、今更逃げるなんて言わないわよね？」

「…………モチロン『ナイス』」

ぐう……今は美波の勘の良さが憎い……

「それじゃ入るわよ。お邪魔しまーす」

「…………おかえりなさいませ。お嬢様」

今回の出迎えは霧島だった（以前の強制連行の際は愛子）

「それじゃ僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれー！」

なんかどんどん中に入つていいく。俺は絶対に入ら。『……お兄ちゃん、行こ？』

…………入つてしまつた

「おかえりなさいませ、『主人様、お嬢様』いらっしゃい唯ちゃん

「…………」「クリ

「わいせつばかり誰せやつかもで」
「たよつだ

「…チャッ」

「……おかげりなさいませ。今夜は歸らせませぐ、ダーリン」

アレンジ半端ねえ

「…お兄ちゃん、翔子お姉さん、寝ないで遊ぶの？」

「気にしないでいい」

唯にまだ大人の世界は早い

「…お席に案内します」

そして席に行く途中…

「それで優子?・佳史くふとはばどいなの?」

「ビビビビビビ…」

「A?・B?・C?・まさか（オメガ）までやつちやつた?」

「隠語が古いしー。しかも つてどんなコト今までやつちやつたのよー?」

「どんなつて…この上。詳しへ詳しひで「ストップお母さん…」

「...飲食店...」あひ...」

「...お兄ちゃん」

「知らん。秀吉そつくりの女子とその母親なんて俺は知らん」

『...』

止めろ！哀れみの目で俺を見るな！

「...注文をどうぞ」

「ウチはこの“ふわふわシフォンケーキ”で

「あ、私もそれを
葉月もーー！」

「僕は水で。付け合わせに塩があれば嬉しい」

明久はスルーで

「俺は“毎のミルフィイーコ”」

「……唯也」

「じゃあ俺は「……」注文を繰り返します」……？」

何をしてかす氣だ…？」

“ふわふわシフォンケーキ”が三つ、“苺のミルフィーユ”が二つ、水と塩がお一つ、“メイドとの婚姻届”が一つでよろしかったでしょうか？」「

「全然よろしくねえぞ！？」

「つーか何故に二つ!? 雄一だけなら一つで十分だろう…？」

「佳史テメエ！裏切るのか！？」

「裏切るも何も俺はもう詰まれかけてんだよ…」

「こんな所でゲームオーバーは“めんどい！”

「……」

「し、翔子！？ これ本物のウチの実印だぞ！？ どうやって手に入れた！？」

「何で俺の実印まで…？」 れわざわざ寮の俺の部屋に耐火金庫の中の防水金庫の中の耐衝撃金庫の中の暗証番号1~5桁の金庫に入れたハズだぞ！？」

『どんだけ木下さんを警戒してるのさ（のよ／んですか／んだ）！』

?』

お前らはアイツの恐いことを知らないんだ!!

「…では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下せこ

「…佳史、俺はどうしても優勝しないといけないんだ…」

「俺もだ…！」

そんな感じで決意を新たにしていると…

「あ、あの人達だよ。さつき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言つてたの」

葉月が指差す方を見ると、ハゲとキューpeeがFクラスの悪口を大声で叫んでいた

…さて

「落ち着け明久」

「ぐえつー?」

先走りそうだった明久を強制的に止める

「あたた…佳史ー..びうじて止めるのセー..」

「バカ、こんな所で殴り合ひなんぢやつてみる。悪評はせりに広まるぞ」

「けどだからって『Fクラスをバカにしないでーー』

「…優子？」

何故か優子が常夏コンビ（命名雄一）にタンカをきつっていた

（side雄一）

『Fクラスをバカにしないでーー』

その言葉に少し耳を疑つた

自分でもバカで多少なりクズだと言ひ直覚があつたから

『あ？ 何でだ？ 成績は悪いし問題ばっかり起こす。しかも学校初の観察処分者までいる。これをクズと言わずに何て言つんだ？』

『そんなのその人の性格には関係ない！ 成績だけで判断出来ないコトだつてたくさんあるわよー！』

『うるせーな。お前だつてAクラスだろ？ 良い格好しようとするなんよ。お前だつて内心Fクラスはクズだつて思つてんだり？』

『アンタ達と一緒にしないでーさつきから何回も来て同じ事ばっかり言つてーはつきり言つて迷惑なのよー』

『んだと？ 女子だと思って優しくしてりやつけあがりやがつて…店員が客に逆らつていいと思つてんのかーー』

『……。』

そう喚いてハゲが木下姉に殴りかかる

…くつ！止めるにも距離がありすぎて間に合わ

パシッ

「…そりゃこいつのセツフだ、ハゲ」

『なつ！？』

その拳を抑えたのは、佳史だった

「先輩だと思つて下手にでてりや…隨分調子に乗つてくれたもんだ
な」

『んだテメエ！部外者は引つ込んでろー。』

「ほお…ならアンタらは一対一で女子と力ずくでやらなきゃ勝てないカス野郎なんだな」

『…畠葉遣いに氣を付けるよ』

「お前らが尊敬に値するならな」

『あ、あ、ー？おー常村ー。』

『おひー・せひめつべー..』

…あ～あ、常夏も可哀想にな

あつや元壁にキレたよ

俺や明久ドヤレ、本氣ドキレた佳史を見たいとねえのこ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9700u/>

バカばっかの君たちへ～アホメンパラダイス～

2011年11月27日21時50分発行